

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十二年八月廿日印刷納本 昭和十二年九月一日發行

第三卷 第九號

浄土

九月號



！峰高最の書用教布！をれこはに盆お

法然上人
鑽仰會編

念佛讀本

浄土信仰の全般を親切丁寧に説いたのが本書です。執筆者は教界の第一線に活躍する古豪・新進、當代宗教戦線の最前線に立つべき好個の教化書物です。

先きに「浄土」特輯號として好評を博し、諸方面の御要求に應じてこの度、装を新たに單行本として再版を見た次第です。

内 容

生	中村辨康
死	佐藤賢順
佛	大野法道
本願	眞野正順
信と行	石井教道
念佛の集ひ	笹本戒淨
社會生活	島野禎祥
女性	江藤徵英
家庭生活	佐藤春夫
念佛の意義	椎尾辨匡

菊判一二三頁、オフセット表紙付
本文五號總ふり假名付

定價 二十三錢(送料共)

講話 一枚起請文

法然上人の「一枚起請文」が浄土宗教の精髓を盡したものであるのは今更多言を要しませぬ。この簡潔流麗な御一文の中に籠る本當の信仰精神を著者の豊富な體驗と該博な智識に基いて、易しく詳はしく説いたもので、これによつて毎日皆様がお讀みになる「一枚起請文」の正しい意味が、生活に即して、はつきりと解ります。目下非常な好評で、寺院、諸團體から布教用、教化用として多數の注文に接してをります。定價 拾三錢(送料共)

多部數購入者への特典

團體、個人を問はず本書を一時に十部以上御購入御希望の向には一割引(九錢)とし、送料は當方にて負擔します。但し代金引換郵便はお断り申します。切手代用は一割増しに願ひます。

發行所 法然上人鑽仰會
振替東京八二一八七

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三錢四十四

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我々が祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。

讀んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活 第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡聖上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歴訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活 一入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇



◇ 浄 土 第三卷 第九號 九月號 目次 ◇

・扉・表紙・目次カット……………鈴木金平

隨想

新秋諷經

吉田絃二郎

・(二)

信仰
閑談

妙好人・良寛

佐藤賢順・(五)

信仰
隨想

この道

中野尅子・(四)

隨筆

思ひ出の山小屋たち

黒田米子・(一〇)

琉球文化
の開拓者

ベツテルハイム博士……………江藤澂英・(六)

現代
語譯

通俗方丈記

佐藤春夫・(四〇)

信仰
相談

中村辨康・(四〇)

歌壇

與謝野晶子・(三)

俳壇

太田耳動子・(七)



信仰
談義

念

佛

森脇孝之 (一)

特輯實話・信仰は産業立國の基！

農村

合掌村の話

少林義正 (一四)

工場

動力はお念佛

戸松學瑛 (二〇)

畜産

生物に結ぶ母縁

本誌記者 (四)

農村更生と信仰

中田一朗 (六)

小説と童話

住蓮と安樂

飯田光明 (四)

かいだうと蟻さん

大戸喜一郎 (三)

法語
解説

何事か之に過ぎ候はん

中村辨康 (六)

編輯 後記

(五)
(六)

◇ 淨

土

第三卷
第九號

九月號

目次◇

改増
訂
版補

信仰讀本

錢三十二 價定 頁〇八版六四 著康辨村中
共料送 付名假りふ總

邪教の迷夢より醒めよ！ 信仰を
正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷蒙から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならぬ。
今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強い信仰への扉を打開く。『淨土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

内 容

- 第一章 悟りと救ひ
- 第二章 宗教と人間の望み
- 第三章 信仰する心持
- 第四章 信仰の本尊
- 第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大野法道著 四六判定 價拾八錢
學教授 法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するが、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その窮々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ。

會仰鑽人上然法 所行發

淨土

九月號

習ひさきよりあらざれば

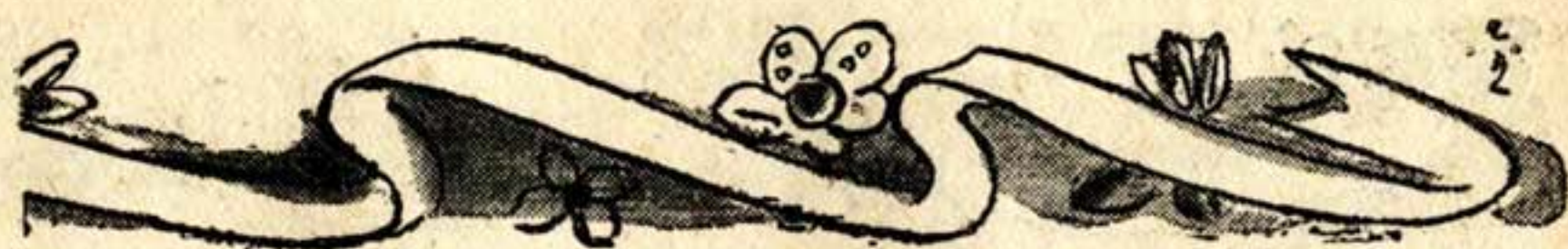
臨終正念もかたし。

常に臨終のおもひをなして

臥ごとに十念をとなふべし。

法然上人法語抄一五二





とは覺悟してゐた。しかしその氣の毒な役割をわたくしが引き受けやうとは。
わたくしは佛陀に先立つて涅槃に入つた舍利弗の心をしみ／＼と想像することが出来る。

佛間の濡れ縁に坐つてゐると、夜毎天の川が澄んで来る。去年までは夜毎庭に出て、牽牛星や織女星を指さして妻と語つてゐたことが思ひ出される。この秋は天の川を眺むる苦しさに耐へない。
しかしわたくし自身の眼もやがて衰へて来るであらう。そして星の光りをはつきりと見ることができなくなつたとしたら、それはさらに耐へられないことだ。たとへ苦しくとも、耐へがたい思ひ出であらうとも、かつて妻と二人で初秋ごとに眺めた天の川はさながらに澄み冴えた星であつてくれ。

無といふこと、涅槃といふことが悲しみの深くなるにつれ、寂しさの切になるにつれ、骨を刻み、肉を削るにつれて自分自身に一番近く、おぼろげながら感じられて来るやうな氣がする。無、涅槃、決して樂土ではない。寂然たる世界である。わたくしは樂土を欲しない。たゞ一筋に寂然たる悠久の實在を翹望する。

今はまだわたくしの悲しみは涙に濡れてゐる。生々しい悲しみである。

やかて涙も涸れてしまふであらう。そこから始めて無の世界のかすかな光りが感じられるのではあるまいか。

わたくしは妻を失つた悲しみを思ふ時、日一日と秋の風の近づく事を恐れる。つくづくと生きる事の苦しさを思ふ。しかし同時にたゞ一人生き残つて思ふ存分天涯孤獨のこの秋を御佛の大慈悲の中によろこんで生きて行くであらう。秋風の聲を聴く時わたくしは最も遠い世界に還つてしまつた妻を思ふ。

しかし同時にわたくしに最も近く生きてゐる妻を感じる。

わたくしは靜かにわたくし自身妻とともに涅槃に入る日を待つであらう。



妙好人・良寛

佐藤賢順

渡しにし 身にしありせば 今よりは

かにもかくにも みだのまにまに

これは越後の良寛和尚が、晩年になつて詠んだ歌です。良寛

にかういふ歌のあるのを、意外に思ふ人は少くないでせう。良

寛の事は、相馬御風、安田靉彦、大島花東、津田青楓などの諸

氏の研究やら紹介やらで、近頃は誰れにも親しまれるやうにな

つて、その洒脱な、自然と融け合つた生活が、小説や童話にま

で書かれてゐるけれども、それは大方は飄逸な禪僧としての良

寛和尚であるか、子供のよき相手となつて、「袖裏の繻襦値千

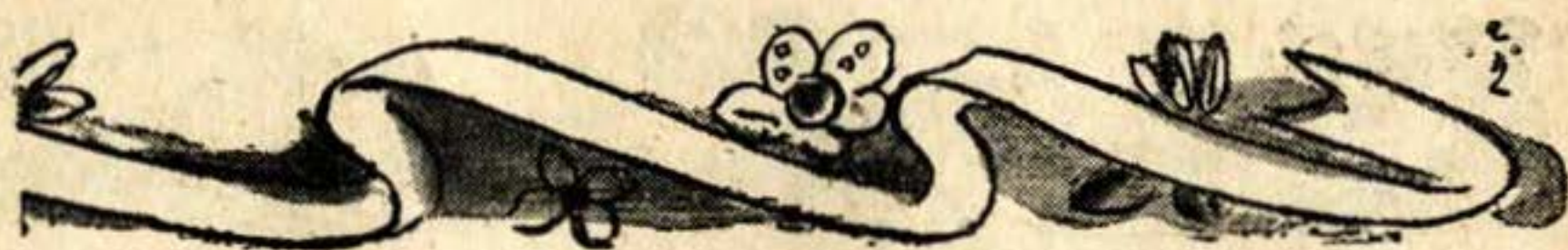
銭、謂ふ言は好手等匹無し」と自慢する位、手毬にかけては、

わしにかなふものはあるまいと得意になつてゐる良寛さまであ

るか、それとも、城市に出でゝは東に又西に、その日の食を乞ひ歩く一衣一鉢の托鉢僧、素々たる五合庵に歸つては、變つての脚を誰に遠慮もなく長々と伸ばして、終日終夜、雨を聴いて眠る和尚であるからであります。

良寛は寶暦八年に越後國出雲崎町の名主の長男に生れたが、十八歳の時、世を厭うて同じ町の光照寺といふ曹洞宗の寺で剃度を受けて出家しました。それから二十二歳の時、備中國玉島の圓通寺の國仙和尚が北越巡化に來て、光照寺に立寄つたのが縁となつて、國仙和尚に従つて備中の圓通寺に入り、こゝで凡そ二十五年間も

衣垢づけば聊自ら濯ぎ



とは覺悟してゐた。しかしその氣の毒な役割をわたくしが引き受けやうとは。わたくしは佛陀に先立つて涅槃に入つた舍利弗の心をしみ／＼と想像することが出来る。

佛間の濡れ縁に坐つてゐると、夜毎天の川が澄んで来る。去年までは夜毎庭に出て、牽牛星や織女星を指さして妻と語つてゐたことが思ひ出される。この秋は天の川を眺むる苦しさに耐へない。

しかしわたくし自身の眼もやがて衰へて来るであらう。そして星の光りをはつきりと見ることができなくなつたとしたら、それはさらに耐へられないことだ。たとへ苦しくとも、耐へがたい思ひ出であらうとも、かつて妻と二人で初秋ごとに眺めた天の川はさながらに澄み冴えた星であつてくれ。

×

無といふこと、涅槃といふことが悲しみの深くなるにつれ、寂しさの切になるにつれ、骨を刻み、肉を削るにつれて自分自身に一番近く、おぼろげながら感じられて来るやうな氣がする。無、涅槃、決して樂土ではない。寂然たる世界である。わたくしは樂土を欲しない。たゞ一筋に寂然たる悠久の實在を翹望する。

今はまだわたくしの悲しみは涙に濡れてゐる。生々しい悲しみである。

やかて涙も涸れてしまふであらう。そこから始めて無の世界のかすかな光りが感じられるのではあるまいか。

わたくしは妻を失つた悲しみを思ふ時、日一日と秋の風の近づく事を恐れる。つくづくと生きる事の苦しさを思ふ。しかし同時にたゞ一人生き残つて思ふ存分天涯孤獨のこの秋を御佛の大慈悲の中によろこんで生きて行くであらう。秋風の聲を聴く時わたくしは最も遠い世界に還つてしまつた妻を思ふ。

しかし同時にわたくしに最も近く生きてゐる妻を感じる。

わたくしは靜かにわたくし自身妻とともに涅槃に入る日を待つであらう。



妙好人・良寛

佐藤賢順

渡しにし 身にしありせば 今よりは

かにもかくにも みだのまにまに

これは越後の良寛和尚が、晩年になつて詠んだ歌です。良寛

にかういふ歌のあるのを、意外に思ふ人は少くないでせう。良

寛の事は、相馬御風、安田靉彦、大島花東、津田青楓などの諸

氏の研究やら紹介やらで、近頃は誰れにも親しまれるやうにな

つて、その洒落な、自然と融け合つた生活が、小説や童話にま

で書かれてゐるけれども、それは大方は飄逸な禪僧としての良

寛和尚であるか、子供のよき相手となつて、「袖裏の繡襦値千

金、謂ふ言は好手等匹無し」と自慢する位、手毬にかけては、

わしにかなふものはあるまいと得意になつてゐる良寛さまであ

るか、それとも、城市に出でゝは東に又西に、その日の食を乞ひ歩く一衣一鉢の托鉢僧、索々たる五合庵に歸つては、變つての脚を誰に遠慮もなく長々と伸ばして、終日終夜、雨を聴いて眠る和尚であるからであります。

良寛は寶暦八年に越後國出雲崎町の名主の長男に生れたが、十八歳の時、世を厭うて同じ町の光照寺といふ曹洞宗の寺で剃度を受けて出家しました。それから二十二歳の時、備中國玉島の圓通寺の國仙和尚が北越巡化に來て、光照寺に立寄つたのが縁となつて、國仙和尚に従つて備中の圓通寺に入り、こゝで凡そ二十五年間も

衣垢づけば聊自ら濯ぎ

食盡くれば城圖に出づ

門前千家の邑

更に一人を知らず

曾て高僧傳を讀む

僧伽は清貧を可とす

と自ら回顧してゐる程の、如法の禪僧生活をしてゐました。四十七歳で越後の國上山の五合庵へ入つてからは、色々な逸話を殘してゐて、その生活は蠟蛻そのものゝやうに思はれてゐるが、修行時代の良寛は決して五合庵以後のやうに、逸話の主人公になるやうな洒脱な圓滑な人ではなかつたのでせう。その胸底には僧風刷新の意氣が火の如く燃え盛り、如何なる困難な荆棘の道も、自らの力によつて切り拓いてゆける、といふ矜持が滿ち溢れてゐたやうでした。彼の詩が何よりもよくその頃の彼の氣魄を語つてをります。「僧伽」といふ僧風の墮落を慨嘆した長い詩の一節に、

我れ出家の兒を見るに

晝夜浪りに喚呼す

たゞ口腹の爲の故に

一生外邊の驚となる

白衣の道心なきは

猶ほ尙ほ是れ怨すべし

出家の道心なきは

之れ其の汚を如何せん

といふのがあります。外邊の驚とは何處か水滸りにガアガア啼いて、人から食を求めゐるあひるのこと、白衣とは俗人を指す言葉で、昔は今とは反對に、僧は緋色、俗は白い色の衣を纏つてゐました。同じこの詩の中には、悲痛にさへ受取れる慷慨の句が更に數行あります。

その頃の作と思はれる「唱導詞」と題する長詩は、佛法の三國僧來、師資相承の有様を具さに叙して、永平の道元禪師の教法こそ、この日本を濟ふものであつたが、その曹洞禪も今は衰運の一路を辿つてゐる、

此の時に遭遇す

大厦の將に崩倒せんとするや

一木の支ふる所に非ず

晝夜寐ぬる能はず

反側してこの詩を歌ふ

と、結んでゐますが、折角の正法の廢れゆくのを嘆く其の反面

に「自分こそ」といふ氣概の一端を仄かせてゐるやうに見えます。

一たび思ふ少年の時

書を讀んで空堂に在り

燈火數油を添へ

未だ厭はず冬夜の長きを

などといふ回顧も若き日の良寛を髣髴させるに誠によい詩であります。

いつの頃の作か知りませんが、

我れ講經の人を見るに

雄辯流水の如く

五時と八教と

説き得て太比無し

自ら稱して有識と爲し

諸人皆是と爲せども

却つて本來の事を問へば

一個も使ふ能はず

といふのがあります。五時八教は天台大師の教判で釋尊御一代の説法のうち法華經を最勝として他の諸經を批判する一つの立

場を指してゐますから、こゝでは佛教の學問的な理解を意味してゐるのです。この詩を讀むと、私どもには何かしら思ひ當るところがありはしませんか。

若い頃の良寛は餘程はげしい修業もし、勉強もしたやうです。五合庵へ入つてからも、日々の托鉢行願は、なかなか容易なことではなかつた模様です。然し、この頃には良寛には既に新たな心境が開けてゐて、在るものは在るが儘に肯定し、美は美とし、醜は醜とし、善は善とし、惡は惡として、その儘に首肯する寛宏な心持が育くまれてゆきました。

眞と道へば一切眞なり

眞外更に妄無く

妄外別に眞無し

如何ぞ修道子

ひたすら眞を覺めんと欲する

試みに覺むる底の心を要めば

是れ妄か是れ眞か

「迷と悟とは相依つて成り、理と事とは是れ一般」とまた別の詩で歌つてをります。眞實も虚妄も、實在も現象も、菩提も煩惱も、一つに即したものでなければならぬ。この「試みに覺

むる底の心を要めば、是れ妄か是れ眞か」といふ反省は、誠に貴いものです。眞と言ひ妄と言ふ、その求める人間の心は一體眞であるのか妄であるのか。まづ在るが儘の人間の心に就いての、眞實の自覺が得られなければならない。僧風の革新と言ひ難行による佛果の證得と言ひ、口には言ひ易くして、實は人間の心はそれ程の仕事に堪へ得るものではない。人間の本性の見直し、人間の力の敢果なさ、頼りなさの自覺、一口に言へば在りの儘の人間の心を把へることこそ、眞の出家への首途でなければなりません。かうなつてほんたうの人間の姿を凝視するならば、

凄々たり秋風の裡

信宿す白衣の家

一衲と一鉢と

蕭蕭たる此の生涯

これがほんたうの姿でなければなりません。「信宿す白衣の家」は在家へ二晩泊つたことですし、「一衲と一鉢と」は一枚の衣とお米を賣ふ爲の一個の鉢です。一衣一鉢を全財産とし、所定めず流れゆく行雲流水の姿こそ人間のほんたうの姿である——これに思ひ當つた五合庵の和尚の心底からは、身の程を超え

た一切の野望は消え失せたに相違ありません。晩年の良寛は、若き修業時代の自らを顧みて、から歌つてゐます。

少年父を捨て、他國に奔る

辛苦虎を描いて猫も成らず

箇中の意志人もし問はゞ

たゞ是れ從來の榮藏生

虎を描かんとした野望は遂に猫をも描き得ず、四十年の修業を経た今日も、矢張り昔の小僧であつた、榮藏とは良寛の幼名であります。

生涯身を立つるに懶く

騰々天眞に任す

囊中三升の米

爐邊一束の薪

誰れか問はん迷悟の跡

何ぞ知らん名利の塵

夜雨草庵の裡

雙脚等間に伸ばす

なにもかも面倒でした。在るものを在る通りに肯定して、その上にお光を受けよう、一切をあなた任せにしようとの心機こ

そは、長い人生の遍路の末に到達する本筋の心境でなければなりません。良寛は十八歳で出家するとすぐ「大愚」と號したといふことです。これに就いては、法然上人の「愚癡」、親鸞上人の「愚禿」など、併せて、また別の機会にお話をしたいと思ひますが、良寛の大愚とは初めは幾分の茶目氣分があつたかも知れませんが、後にはほんたうの意味で、その自覺が、切々と迫つてきたのに相違ありません。

西方極樂國

南無彌陀佛

一念又十念

往生何の疑ふ所ぞ

大島、原田兩氏編の「良寛詩集」を讀んでゐて、この詩を探し當てた時、私は「なるほどなるほど」と肯いて、確かにある筈のものを探して當てたやうな氣がしたのです。それといふのも、曾て、安田毅彦氏編「良寛遺墨集」の中で、良寛一流の丸っこい氣品の高い字で、誰に氣兼ねもなく伸び伸びと書いた「南無阿彌陀佛」を見たことがありましたから。

お念佛に落着いた良寛和尚のことは、餘り誰も物語つてはゐないやうですが、相馬御風氏著「一茶と良寛と芭蕉」の中には、

流石にこの事實を見逃さず、示唆するところ豊かな一節があつて、良寛の歌として、

不可思議の みだのちかひのなかりせば

何をこの世の思ひ出にせむ

やちまたに ものなおもひそみだ佛の

もとのちかひのあるにまかせて

われながら うれしくもあるか彌陀佛の

ゐますみ國に行くと思へば

などの喜ばしい歌が擧げられてゐます。良寛和尚もお念佛を唱へて極樂往生をした方であることに疑ひはありませんまい。善導大師は觀無量壽經の「この人（念佛を唱へる人）は人中の白蓮華である」といふ句を釋して、「人中の妙好人、最勝人である」と申されましたが、その意味では良寛和尚も亦、人中の妙好人であつたのであります。

私は別段良寛に就いて多くを知つてゐる者ではありません。偶々病床に臥して、良寛遺作集を讀み耽り、良寛も亦、妙好人であつたことを知つて、愈々親はしく、愈々嬉しく、この一事をお傳へしたかつたのに過ぎないのであります。（終）



筆：隨

思ひ出の山小屋たち

黒田 米子

立秋、といふ暦をめくる日になると、東京に住んでゐても、何となく夕立が多くなつたり、夜の涼風に鳴く虫の聲がまじつてきたりして、一脈の清涼の氣が感じられるものだ。

日々照りつゞいて灼くが如き日光も、そこはかとなく斜光を帯びて、プリズムの中心のねらひから外されたやうなゆとりが出てくる。

そして、かん高い蜩の聲の、物悲しいひびきを、身邊にしみぐと感じられてつひまだ一と月も経たぬ七月には、この夏はどこへ、こゝへと、いつばいの夢で胸をふくらませて楽しんでゐたものを、いろ／＼の

障害で、まだ實行されたものが何も無いばかりか、世間の騒がしさに心を傷め、日々の勤めに油汗流してゐる今年のやうな夏や、もう一度くらゐ山の絶巔に立つてきたか、森や高原を歩いて來た思ひ出をもつ夏など、それ／＼の夏をいつしか振りかへつて見るやうな氣持にさせられる。

カナカナ、カナカナとたゞみかけて鳴く蜩の聲は、秋の初聲として、私の大好きなもの、一抹の寂びしさと共に、また、何か、このまゝで居られないやうな、これはいゝのかと念を押されてゐるやうな、人の心に或る反省をあたへるひびきを持つてゐる。

仕事の上にも、さては夏のたのしみのプランにも、カナカナの聲を聞くと何か氣急はしく追ひかけられる。そして、あの夏、この夏と、思ひ出を辿る氣持にもなる。

いつたい、放送局のプログラムを編むといふ仕事をもつてからこれで三度目の夏、脱けられぬ位置と仕事の忙しさがそれ程なのか、やはり早くから手順を考へてゐても、いざ夏休みをとつて、のび／＼と山の生活を味ふやうになるのは、何うも八月も半ば過ぎ、山にはもう秋の氣が寄せてきてからになる。

去年は木曾駒ヶ嶽の山の家、一昨年は霧ヶ峯、何れもスキスの山小舎にでもありさうに四邊の山に相應はしく、丸太組みの素朴な山小舎で、そこに集ふ快い人々の中に、私の夏の山の生活がひらかれた。

霧ヶ峯は、諏訪湖の北に高まる臺地の奥、蓼科山から美ヶ原へと、廣くはるかに

盛り上つてゐる火山性の高原の中、緑波浩蕩と夏空の下に擴がつて、車山といふ高みや、八島池鎌ヶ池といふ火山湖の美しい水をたゞへるなど、いとも美しい高原であ

ツと赫く岩肌を燃やして、いとゞ私の心を捉へ、その後、秩父の木深い山脈を重ねてゐる。

南には諏訪の盆地の上に、まづ甲斐駒が



る。しかもその景觀が素破らしい。

東には怪奇なまでに突兀と巖峭美を發揮してゐる八ヶ岳がその青い裾野の彼方に朝にはくろ／＼と聳え迫り、夕映えにはカ

君臨し、仙丈、白峯三山と重り、はるか秀麗の富士山を望む南アルプスの雄峯疊々たる雄大さ、南西の木曾駒ヶ岳も亦魅力ある山群としてうづくまる。それと接して

西から北へ、木曾御嶽、乗鞍嶽と一つ一つ盛り上り、そして松本平の安曇野の向ふにグット千米ぬきんでゐる常念、大天井、燕の山脈に重つて、おゝ、なつかしい穂高嶽の想ひ出ふかい鋭いギザ／＼、天を突く槍の穂よ。惚れ惚れとする山岳美だ。

しかも、立山剣も天際にあり、針の木峠から爺、鹿島館と嶺を重ねる地に雪多い白馬も見える。また北の美ヶ原の臺地越しには、煙はく浅間嶽も夢とうかぶ。

秋草の高原に立てば、眼に入るものは四邊をかこむこの山々の大観、眼を放てば人の顔とか家々とかの映じて来ずには居ない日常の生活から、ぐつと思ひ切り飛躍して、私はその夏、霧ヶ峯にふさはしく選ばれた人々のグループの中に、まつたく新しい別世界の中に、想ひ出して、魂の洗はれるやうなすぐれた山の生活をした。

高原の朝雲がうすれ散つてゆく黎明には

高みへ登つて火山岩に腰かけ、明けてゆく天地を眺め顔を出してくる山々に、まづその朝の挨拶を告げる。ヒュツテの前のヤマドリゼンマイや紅あざやかなシモツケサウの間から流れ出る清冷の小川で顔を洗ひ口をすゝいで、さて快い朝食をすませ或日は藤原咲平博士に窓から仰ぐ空の雲の知識を授けられ、木暮理太郎先生から登山昔話をうかゞひ、武田久吉博士には、採集してきた植物の實地指導をうけ、さては柳田國男先生の山の神の傳説、尾崎喜八氏の詩話など、何と豊かに滾々と湧く泉のやうな、思想、知識のるつぽ、何と快い山岳愛好の、眞理愛好の人の群！

その午後は己がまゝに、私はよく武田久吉博士について、或は車山に、また鎌ヶ池に、高原を歩き、語り、また植物をたづねたものだ。いと可憐に薄紫の花ひらく車山の頂の岩かげの繊細なイブキジャカウサウが木であつて、人の丈より高く草からぬきんでるシシウドが草であることも

聴き、鎌ヶ池の踏むに惜しいモウセンゴケを見……また中西悟堂氏にアカゲラ、ノビタキ、ビロージなど、鳥の聲を教へられ……夜はまた集つて、前農林次官などいふ物々しさを軽く脱ぎすてた石黒忠篤氏や柳田先生武田先生等の論戦も賑はしく、山を語り、人を語り、星を眺め……何といふ心暢びやかな、山岳と人との生活が、その霧ヶ峯のヒュツテの屋根の下にひらかれたことか。そして夜は六疊ほどの長四角の小部屋の兩側に、上下二段づゝに設けられた棚式の素朴なベツトは、實によき安眠を私に與へてくれた。

その夏の霧ヶ峯の生活のよさと共に忘れがたい、霧ヶ峯ヒュツテと、はからずも實によく似た建物を、去年、木曾駒ヶ嶺の山腹に来て発見した私は、なぜか全然見知らぬものゝ中に侵入したくて、わざと木曾まで来た氣持なのに、やつぱり舊知のなつかしいものに觸れた嬉しさを味つた。そ

の山小舎は、御嶽行者で賑ふ木曾福島の町から三里ほどの東方、静かに鄙びた駒ノ湯といふのまで自動車に運ばれ、それから山川添ひの秋草の道を二十町ばかり登つて達する、駒ヶ嶽登山道の三合目餘、幽邃な森林を背に負つて、素朴な丸太小舎造の平家が秋草咲く高みに静もつてゐた。

こゝは、全然初対面の名古屋方面の學生が、高文受驗や論文の勉強のグループが、快い雰圍氣をかもしつてゐた。山にも人にもまつたくエトランゼの私は、いつそ、それも生活の飛躍をするによつて、日常を離れて快く四邊の山に浸りきつて過される。

讀書に倦めば、木深い山道を登つて瀧を訪れたり、野全體を紫に染めて咲く桔梗の原に遊んで木曾谷ごしに雄姿を陰見する雲の上高き木曾御嶽を仰ぎ、又は、山づたひに炭酸泉の湧く源を訪れて掬んで飲みつゝ、あの雲の邊りに穂高も槍も見えり管と指示され、あまり晴れぬ空合がかへつ

て休養に幸したらう、私は山中に悠々自適した。

夜は小舎前の藤椅子に、ひとり夜空の星と月をながめてゐると、天地の悠久が身内に滲み入つてくる……

凡そ、私をたのしませてくれた二つの山小舎の想ひ出よ。その貴い二つの山小舎が、何れも昨冬に火を發して、空しく烏有に歸したといふ。

そして、今、夏の草が、火ではぜた火山岩の土臺石や、玄關に敷いた大きい石の間、佗びしくも生えてゐるであらう。山の中にも亦、人の世の流轉のすがたはまぬがれないもの……焼けて煙となつて昇天したがゆゑに、霧ヶ峯と木曾駒ヶ岳と、この二つの山小舎は、いつまでも渝らぬ印象の、貴く盡きせぬいのちを私のうちに貽してゐる。想ひ出の山小舎たちよ！



ノーシンのいいところは服む……スツと痛みが消える同時に、頭の疲れを恢復する……この二つです而かも胃腸等には勿論、安全で、連用すれば頭脳ばかりか、心臓迄も強補する効果あり。これでこそ完成せる模範的頭腦薬と稱せられる所以！

頭の痛みと疲れに



三錢・五錢・一圓・二圓

特輯實話・信仰は産業立國の基!!

「はしがき」國民精神の作興が強く叫ばれてゐる今日、北支の時局多端なる今日、佛教家と佛教的信仰を把持する人々が都市に農村にその所信を實行することによつて、日本精神の強固な基礎を築いて行くことこそ望ましい。而も、それが今や到る處に行はれつゝある。こゝに擧げる實例の二三は遠くさゝやかな事實かも知れぬが、それでもこの精神が日常の生活の基調

一村を擧げて佛教の生活化を實行した

合掌村の話

少林義正

法螺が鳴る／＼若衆の法螺が曉の明星に鳴り響く

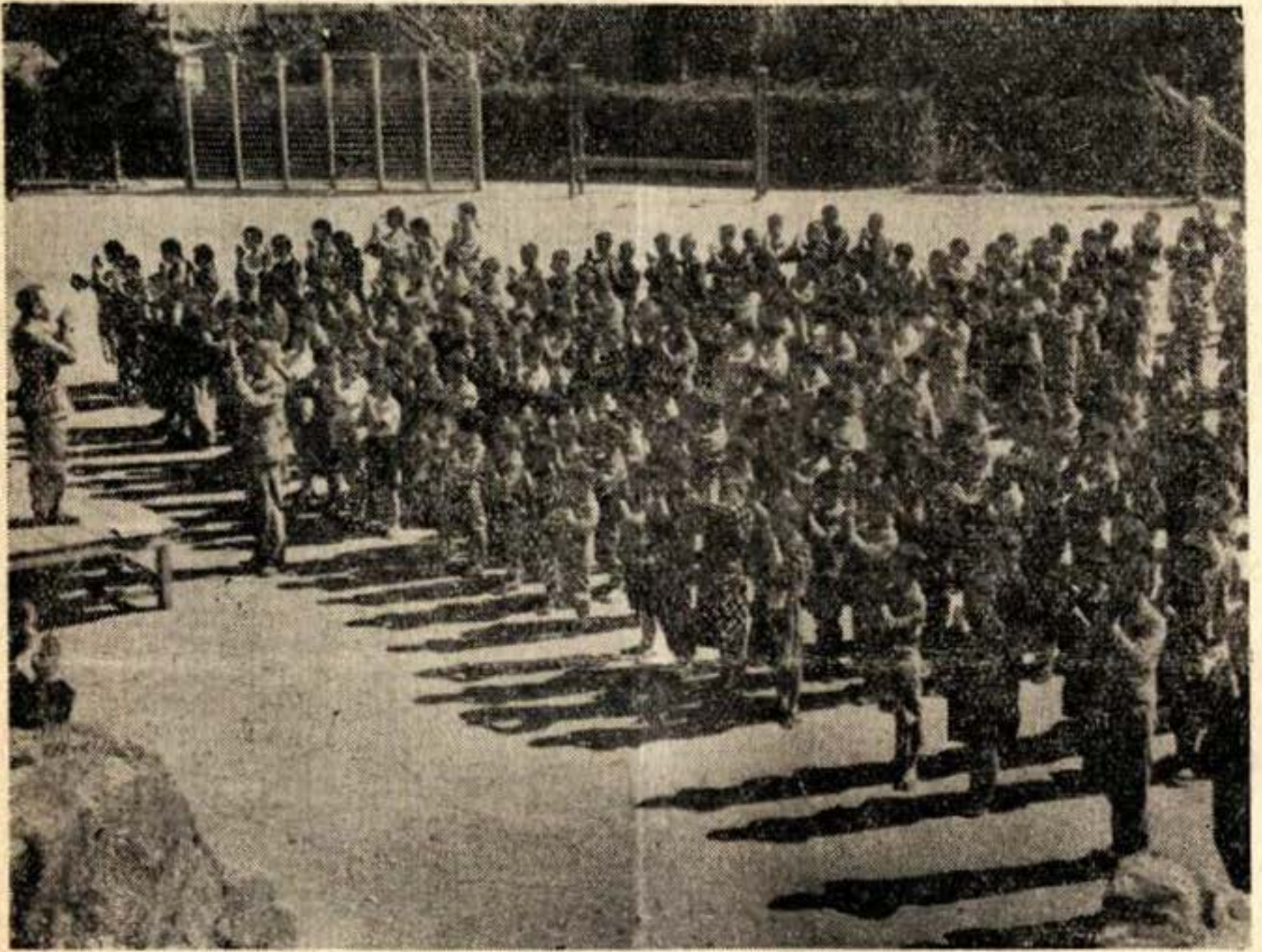
伊豆の南端、石廊崎の燈臺に隣る一小村、三坂村の各部落からは毎朝、東天白々とあけそむる頃青年の吹き鳴らす法螺貝が朗々と鳴り響く、村人達はこの音と共に一齊に床を蹴つて各々朝食前の分擔作業に取りかゝる、男女青年は特定の日にはこの法螺貝を合圖に一所に集合して國旗掲揚、造拜、禮拜、奉仕作業、共同作業等、或は寺院に集合して早天修養會を催します。

かくして、「合掌村」と呼ばるゝ静岡縣賀茂郡三坂村の朝は法螺貝の音と共に繰り展げらるゝのであります。一體、合掌村とはどんな村かと云へば、一村民擧つて日常合掌生活を營んで居るので、かくは呼びなされて居るのであります。

以下合掌村についていさゝか語ることといたしませう。(次頁寫眞は三坂村小學校始業前の合掌)

をなしつゝ、地底の流
れの如く、次第に根強
く全國民の中に浸透し
て、傳統ある國民精神
を更に力強く培養す
るであらうことを信じ
て疑はぬ。

宗教は實行であり、
實行によつてこそ始め
て信仰は實を結ぶ。宗
教と生活、産業との不
可分な結合の中に新生
活の光明がある筈だ。
一つは風光明媚な
海邊の一小村に、一つ
は都會の一鐵工場
に、一つは山境の一農
村に信仰に培はれた集
團生活が輝き出して
ゐる。非常時局の一
光明として……。



私は昭和三年以來合掌生活の嚆矢に微力を
捧げ、「合掌の家」「合掌の村」建設運動に精進
を續けて居りますが、この合掌の生活こそは
まことに、何時でも、何處でも、誰でもが行
はれる佛教の端的なる生活化であり、最も効
果的な宗教教育でもあり、而も、十指の双掌
を合せる姿と心は一君萬民、億兆一心の日本
精神の顯現でもあり、この「拜み働く」生活
の強調こそは地上に佛國土建設の適切なる宗
教運動であり、同時に、大乘相應の地と稱せ
らるゝ日本の、國民運動でなければならぬ
と信じて、同志と共に、「合掌聯盟」「合掌の家」
「合掌の村」建設運動に微力を盡して居る譯
であります。幸に私の居住地、静岡縣賀
茂郡三坂村に所謂「合掌村」が建設された譯
であります。これが完成には種々の難關も
あつたのであるが兎に角、昭和八年には三坂
小學校の根本方針として合掌生活を次で校是
と定め、昭和九年にはこれを村是として、村
の經營も、學校の教育方針も、各種團體の施
設もすべて合掌生活を基調として、積極的に



我が村の信條

働きつゝ、(勤勞生活)

考へつゝ、(合理生活)

拜みつゝ、(合掌生活)

一家一村の振興を圖り

一國融合の達成を期す

宗教生活(拜みつゝ)、合理生活(考へ

つゝ)を基調として勤勞生活を営み、この

三即一の生活を以て村の指導原理、行進

目標とし、この精神を村民の生活に浸潤させ

る爲めに、學校を初め各種會合には合掌默想

の後必ず之を齊唱し、各家庭に於ける家庭朝

禮、家庭修養會等にも家内打揃うて齊唱する

ことになつて居り、尙之を手拭に染め抜き、

辻々の道標にも書き、小學校では信條を表徴

した鉢巻を使用するなど、隨所に生活の指標

とされて居ります。

合掌生活の要領

一、朝の合掌

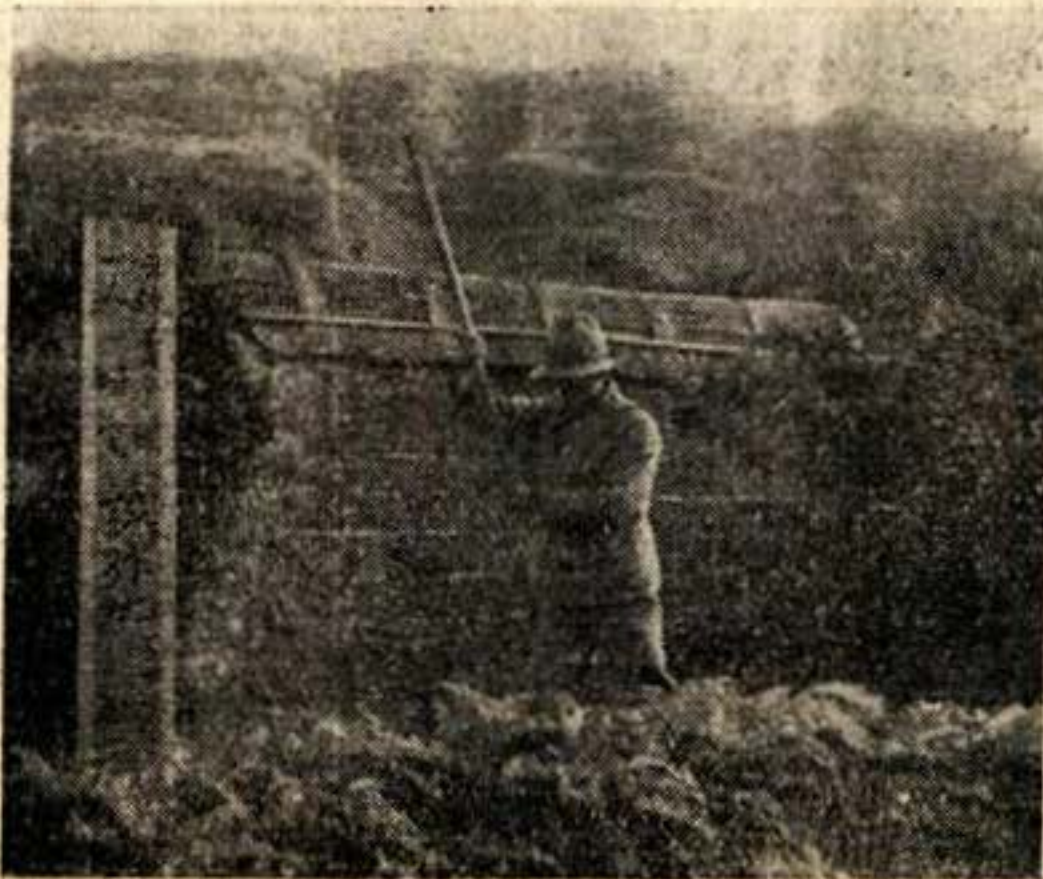
二、食事の合掌

三、夕の合掌

四、會合時の合掌

五、野人合掌

必ずしも以上の要目にかゝはつた譯ではな
いが、一日の生活の中にハツキリと右の五項
目を通して姿の上に現はして行かうといふの
であります。先づ、(青年團一人一研究試作地)



「理想郷三坂村建設」を目指して村民總動員
で起ち上ることになつた譯であります。

三坂村々歌

(一)山青く水は清らかに 人はみな睦み囀みつ

合掌の生活尊とし 三坂村こゝに榮えむ。

(二)海ひろく砂は眞白し 人はみな一つ灯影に

集ひ來て道を語らふ 三坂村こゝに薫らむ

(三)花は咲き鳥は歌へど 人は皆永久の希望に

綱を曳き鍬ふり下す 三坂村こゝに誇らむ

一、の朝の合掌は、「家庭朝禮」と云ひ家族一同揃つて之を行ふのです、先づ家族全員一齊起床、分擔作業、時至つて合圖により皇太神宮遙拜（二拜二拍手一拜）、宮城遙拜、佛前合掌禮拜、朝の勤行、了つて一同向き合つて「村儀條」二回齊唱「お早うございます」の朝の挨拶といふ順序、之を基本として随時臨機に之を行ふのですが、要するに朝必ず一回合掌するといふことになるのです。

二、食事の合掌、食前食後に必ず「頂きます」「御馳走様」と唱へて合掌する、小學校その他心ある家では食事訓「五觀之偈」を唱へて箸を取ります。たとへ野良に於て辨當をつかふ場合にでも如法に合掌して食事するので、野邊に家族が圓く座つて感謝の合掌を捧ぐる姿は正に一篇の聖畫であるとして映畫やカメラに納めて行く人も少なくないのです。

三、夕の合掌、夕の合掌は朝の勤行のやうに家族揃つて行ふことは出来ないが、但し月例

家庭修養會には一同揃つてやる、各自別々に神佛靈前に合掌禮拜、一日の生活を感謝し、合掌默想の後先に寝る者から「お休みなさい」



の夕の挨拶をして床に就く、男女青年團員、小學校の高學年の生徒は「一事貫行の誓願」が申合せてあるので就寝前に「貫行表」に記

入してから床につく。

四、會合時の合掌。村内に於ける教化常會、男女青年團、婦人會、各種修養會等の會合に

は司會の様式が大體定まつて居り、先づ、定刻十五分前集合、時至つて、遙拜、禮拜、讀經、合掌默想、御製拜誦、開會之辭

——以下次第により多少は異なるが、大體會合は二時間を標準としてその間に「村歌」を合唱し「儀條」を齊唱し、「合掌歌」を高らかに歌ひ、時には「三坂音頭」の歌につれて踊る場合もあるが、兎に角すべての會合には初めと終りに必ず「合掌默想」一することは忘れないのです。

五、對人合掌。人に對して随時隨所に合掌する、會合等の場合でも講演の前後に講師に對して合掌する「拜むものは拜まるといひがみ合ひより拜み合ひて」の心持で……（上掲寫真作業前の合掌）

× 宗教教育が盛んに唱へられて居るにも拘らず、その實施に支障を生じつゝあるのは其所



一 家打揃つて食前の合掌

に一宗一派に偏した宗門教育が伴ふが爲めである。と云はれて居るが、合掌こそは何れの宗教にも抵觸せず、而も合掌の姿を通して各々の持つ宗教の信念に浸り得ることが出来るので、宗教教育は先づ合掌を通して個々の信念を増養すべきものであると思ふ。恐らく人間の現し得る一切の作法の中に於てこれ以上敬虔な姿は有り得ない、人間の最尊最上の姿、

之を學校教育で捉へる、立派な宗教教育になると思ふ。三坂の小學校に於て之を取り入れて居るのであります。

先づ、毎朝始業前の朝禮には職員も生徒も一同合掌黙想の後合掌のまゝ御製を拜誦いたします。即ち宗教的の信念と國民精神とが同時に合掌の上に體現されるのです。晝食には各學級共先生と共に合掌して食事訓（五觀之偈）を唱へて箸をとります。その他作業の始めには合掌して「村信條」を齊唱し「汗」と「信」の二文字を顯した鉢巻をして仕事に取り掛り修身の時間にも時に合掌して經典、或は聖句を朗唱する場合もあり、かくの如くに學校の一日は合掌に始まり、合掌に終るとも云へませう。

尙、小學校に於ては兒童をして村内に於ける合掌生活の状況を調査せしめ、之が統計をとつて積極的に合掌生活完成の爲めに實行運動を行つて居ります。

各種の事業

笑話音の説明

田舎道を七千弗もする高級車がドライブしてゐた。その自動車が前を走つて行く小つぽけな自動車に追ひ付いた時、高級車の持主は、このボロ自動車をからかつて見たいと云ふ誘惑に抗し得なかつた『おい君！ 君の自動車のその恐ろしくガタ／＼云つてゐるものは一體何んなの音だい。』と聲を掛けた。

『あゝ、これかね』とボロ自動車の持主は答へた。『これはね、僕の懷中の中でガチャ付いてゐる六千五百弗だよ』

各種の修養會、及び集會、その他。

家庭修養會

毎月一回月末に各家庭に於て家族全體集まつて「家計簿」「更生簿」の月末計算をなし、その後で「家族協議會」を催し經濟上その他の家内相談をします。それが終つてから所謂「家庭修養會」を催すことになるのです。即ち、娛樂、感話、反省、朗唱、合掌黙想、夕禮等、適宜に一家團樂の一夜を作ります。

この外、小學校生徒の參加する「家庭修養會」女子青年團の參加する「家庭修養會」があります、それは各部落の男女別に大凡數人の生徒が先生と共に一家庭に集り、その家族と寢食を共にしながら一夜宿泊修養會を催すであつて、女子青年團のも同様です。即ち、生徒や女子青年を通じて相互的に修養し、拜み働く家庭生活の基礎的訓練をしやうとするのであります。

男女青年團早天修養會
毎月二回、早天未明に寺院に參集吉祥院（曹洞）海藏寺（臨濟）の二ヶ寺、參禪、讀經、お話、體操、作業等約二時間。

寺院宿泊修養會
小學校高等科の生徒は三月、八月の二回、三泊四日間寺院に宿泊して徹底的に宗教を育を行つてゐます。勿論職員全部參加。

男女青年團も毎年一回二泊三日間寺院に宿泊修養會を行つてゐます。

泊修養會を行つてゐます。

佛教會

毎月二回夜間、信仰中心の集會、婦人會

婦人會

文部大臣より表彰さる。

佛教會托鉢

毎年數回村内を托鉢し、これによる淨財を救貧、施療、文書傳道、勤行集配付等に使用。

用。

生活改善

青年の一人一研究、婦人の消費經濟の合理化、結婚改善、服裝改善等は相當に見るべきものがあります。

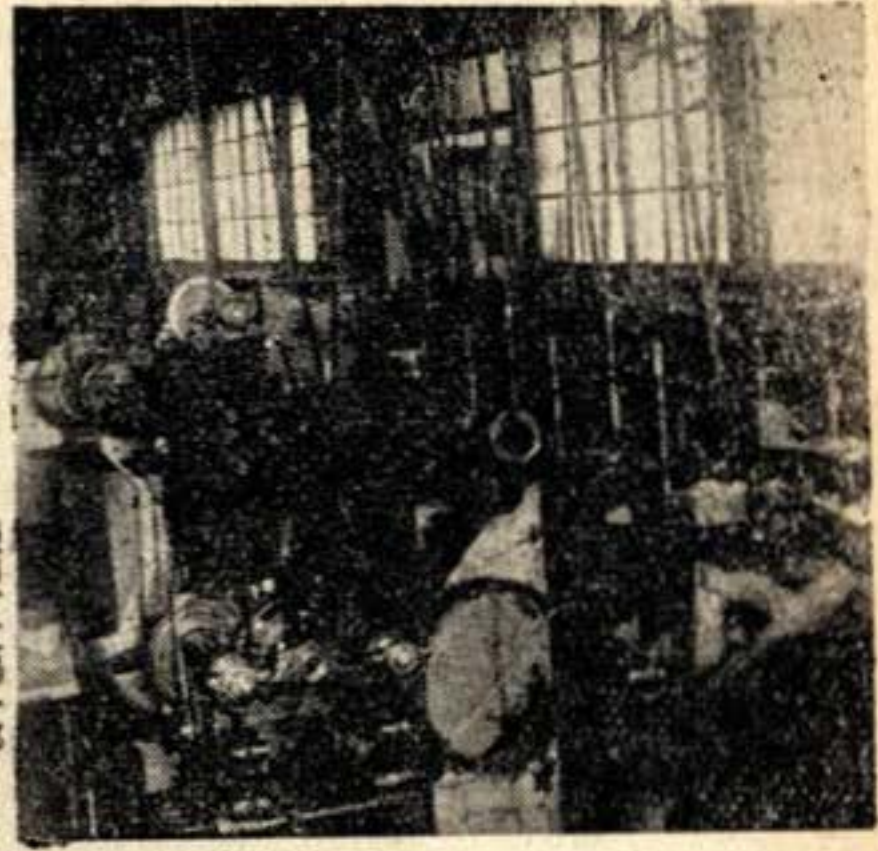
合掌村は機構上には大體整つたかの觀がありますが、内面的には理想に遠きこと千萬里、まだ／＼大いにつとめなければならぬこと、思つてゐます。

（昭和一二、七、二四日）

—— 勤勞の力は合掌の腕に漲る ——

（筆者少林義正師は合掌村の創設者であり、指導者の一人である、本文は特に本誌のために筆を執つて本稿を寄せられたもの。寫眞も師の御厚意によつて拜借いたしましたものです。——編輯部——）





鹽田町工場一部

諸機械工具の靈位

工業立國の本部はコ、ですと云ひたらん如く景氣よく廻轉して居るエンジンが、命令一下、ストップすると、此處、東京蒲田區六郷町鹽田工場の主人片山近市氏も工場長も職工さんも女工さんも轉手古廻しで工場の片隅を清掃してやがて、恭しく阿彌陀様の掛軸を窓際高く掲げ奉り香華供物、簡單ながら心をこめて供養し、テーブルの中央には改めて諸機械、工具の靈位と記した位牌を祀り、藥師

動力はお念佛

信仰の工場と工場主を語る

信仰は産業
立國の基！

戸松學瑛

感話、實感と云つた風なもの。

『諸君、當工場の機械や工具に靈がある處の話ではない、製造されたネジ一つ、鋸一本にも靈があります。お釋迦様は山川草木も皆成佛すると仰せられたと聞いて居ります。靈のある一個の物も勿體なくて仇や疎かには出来ません。こゝで作る品物のお蔭で吾等何百の家族が生活して行けると思ふと感謝せずには居られません。人間が靈あるものを生かさず之を犠牲にして顧みない時に人間苦が生ずるのだと思ひます。つまり罰？が當る——因果應報とより考へられない。』

席を設けて本山布教師の讀經、念佛一會、工場主も番僧の格で合唱、並居る百餘の男女職勞者諸君も肅然として合掌の姿、一瞬にして變る工場佛殿、香煙漂りて先きの程までの騒音は何處へやら、山寺へでも入つたやうな氣がする。忽ち響く車輪の音、工場に接して走る京濱電鐵の震動が都會の邊地、工場地帯になくしてはならぬ一風景とでも申さうか。かくて導師の回向も法話も濟んで感受性の強い若い人々の顔はそれ／＼に輝いて居る。溫顔重厚、眞摯な工場主は珠數を爪繰る手を差しのべて従業員に話しかけるのが常である。勿論その話は斷片的のもので豫め構成されたるものではないらしい。時に臨んでの

「人間苦を取り除くにはお念佛の力より外に力はありません。苦しみに沈む者を浮ばせるものはお念佛です。犠牲者を作らずそれを浮ばせる事とはそのものを拜む事です。佛の慈悲に愚かはありません。佛の大慈悲を體驗するにはお念佛に限ります。論より證據、お念佛を申して居る間に感謝の念がこみ上げて来る。そんな時は從業者は勿論のこと回轉して居る機械を拜まずには居られません。私利私欲の功利根性からではありません。そんな私心は跡方もありません。お念佛の力でつまらぬ罪欲が消え去るとでも申しませうか、菩薩さまの心持が身體に宿るのではなからうかと思はれます。

生身の人間であり、凡夫の事ですから怒る事もあり、苦しむ事もあり、惱む事もあるにはありますが、怒りや苦惱をそのまゝ感謝の心に振り向けて一切の苦勞を無くすには何と云つてもお念佛です。

機械を使ふにも念佛

「お念佛申すものは救はれる」と云ふのは本當です。未來あの世でなど、遠い話ではない。この身このまゝ氣持ちがよくなり、輕快となつて喜びの生活が出来る。『念佛は萬德が圓満に籠つてゐる』と聞き及んで居るがこれは眞實であります。

現實ばかりを、みつめてる人や現實ばかりを尊んで居る人は物のみを見て肝心の德を積まぬ。それだからあくせくして而も萬事に滞りが出来、兎角意の如く發展出来ないのであります。

德を含蓄して居る事の多いお念佛は一返でもよいかわれませんがやはり始終申して居るに越した事はない。即ち日常生活は念佛の生活であることが必要で一朝一夕で思ふ盡に入るとは云ひ切れない。私共は機械を使つて居る内にも商品を取つて居る間にもお念佛を申して居る心構へが大切である。お念佛を以て靈ある機械工具に更に馬力をかけることにすれば、佛力に引き立てられて益々飛躍が出来るわけであります。業績の如何は別としてお

念佛で工場に臨む事を私共のモットーとした。優良品も出来ず、貧乏はする、諸事不如意となる、生業が成り立たぬ、苦勞が増す、こんな事では極樂世界へゴク樂に生活する世界へは愈々遠方となる。極樂が遠くになつて居つてはいけません。極樂が死んだ先遠くにあるとしても、近くにあるとしてもその極樂は現在の極樂の延長であつて全く縁の切れたものではありません。この油染みた工場がそのまゝ極樂であります。此處が極樂世界であつてこそ人も機械も工具も、ネジも、鋸も生き生きとして光りを放つて来る。佛さまや菩薩さまはお頼みしなくとも護つて下さるにちがひない。

「然し、最初から信仰生活に恵まれるものではない。私などは幼時には故郷佐賀縣鹽田町に居つて、念佛者の名で通つた祖父が樂々と大往生を遂げたのを知つて居るので子供の時から念佛で人間は救はれると云ふ事は信じて居つた筈であつたが、十六歳で國元を出、大阪に往き、商店で働いたり經營したりした。仕

事、い、か、ひと呼ばれ、相當のやり手と評判された私であつたが結局、うまく行かなかつた。それから東京へ出たのでありますが今から思へば苦しみぬいたのが當りまへであつた。

大阪時代の私は、私慾のための働き手、やり手であつて、道のためのやり手働き手ではなかつた。過去、現在、將來の三世に渡る見透しのつかぬ、言はず無方針の盲動であつた、現金主義、現實主義であつた。「我」を捨てぬ限り本當の成功は出来るものではない。東京へ来て増上寺さんへ參詣する機會に恵まれ又諸上人の指導に會へて何となく盲動が恥かしくなつて來ました。お念佛のお影で、徳を積ませて貰ひ優良品を製造する事になりました。

念佛主義と能率増進

「私は今は小さい乍らも工場主であるが専門的の技術は工場の誰よりも下手である。たゞ佛様のお徳によつて諸君を導いて居るに過ぎない。私の經驗によれば、佛の道によつて物

事を經營すれば商賣でも、工場でも、家庭でも、社會でも、すら／＼とやつて行けると信じて居ります。少しの碍りもないものと思つて居ります。この場合呉れ／＼も申したい事は自我が突ツ張つて居つたのでは駄目だと云ふ事です。「佛の道に私なし」です。私の張つてる者、私のある者は折角佛の光明に照されながら却て眩しくて正視が出来ない。その結果自然に業界から淘汰されてしまふ。所が、さうでない人は佛徳によつて皆淨化された上善人となる。上善人の仕事は上等の成績を擧げられるものと斷言してよいと思ふ。當工場が佛教精神、法然上人の念佛主義で本氣に製造する生産品には確に自信を持つて居ります。この事は已惚れでない。この小工場で出来るネジがアメリカや印度にまで販路を擴張してヒケを取つて居りません。これは全く法然上人の賜物だと云つてよい。

「念佛主義で製造する品物の品質が優秀となるばかりではない、仕事に精が出ると申さるか一心が籠ると言はふか念佛主義が普及する

農村更生運動 と信仰

中田 一朗

昭和五年以來の深刻な農業恐慌のため、農家の窮乏が次第に甚だしくなり、遂に農村不況の打開といふことが全國家的な重大問題となりました。農村更生運動が喧ましく唱へられてきたのはその爲であります。

一口に農村更生と申すものの、さて具體的にこれを示すとなると、その内容は頗る複雑多岐なもので、仲々面倒なものであります。例へば一方に經濟的更生が説かれてゐるかと思へば他方精神的更生の必要が叫ばれてゐます。又經濟的更生の内容として、驚く勿れ四十億に達する全農村の負債整理の問題が第一だといふ主張もあり、又米や麥や繭といった農産物の價格の維持が先決問題だといふ説もあります。いや農民教育の刷新だ、金融問題の改善だといふ風

につれて能率が増進して月々の生産高が上つて居ります。拜むことの有り難味は工場から、店頭から溢れ出ます。

『お念佛の徳を積んで行く内に罪障は亡びて行き、如何なる人も、商賣もボツ／＼よくなくなるにきまつて居る。品物も片輪を作るな、作れば片輪が泣いて居る、佛さまが泣いて御座る。器量のよい物を作れ、さすれば佛さまも共に喜んで居られる。』

『希望に起き、歡喜に働き、感謝に眠ると言ふ言葉があるが信仰の生活をするものは眠るも、起きるも、感謝づくめ、喜びづくめ、希望づくめ、何の不足のない行き詰らないのが實に勿體ない程有り難い。何事でも念佛で解決出来ないものはありません。昨今『心臓が強い』と云ふ言葉があり、鐵の心臓など云ふふ語さへ耳にするが徒らに鐵の心臓と云ふのは結局横着者と云ふ事で、人間の心臓は弱いのが當然、たゞ佛さまの御加護による心臓は鐵よりも、石よりも強い、金剛の如く強いと

云ふ事を確信して居りますが、世渡りや、仕事は念佛主義で是非ともやつて行きたいと思つて居ります。』

むすび

諄々と語つて居る工場主は識らず知らず合掌をして居る。工場も念佛、世渡りも念佛、而して家庭も念佛第一——芝の販賣店の二階には記念の佛壇があり毎日朝の仕事前、夕の仕事仕舞には店員は一人一人その佛壇前に端坐して佛さまを拜がむことになつて居る。夫人も熱心な念佛信者で阿彌陀經の讀誦など感服させられる。念佛を以て生活を一貫して行かうとする夫妻の生活態度は何等の無理がなく、傍の見る目も如何にも朗かである。店も、工場も佛と共同生活、最近の工場安全週間に優良工場、模範工場の選に入つた鹽田製作場の原動力はお念佛であつたと氣がついて一段と粉骨碎身、お念佛主義で國家の超非常時に善處しやうと働きぬいて居る若い従業員も無かし多い事であらう。

に眞に多種多様な有様で、そのどれを探るか、必ずしも簡単な問題ではないのであります。思ふにそのいづれの説も夫々に正しいのであつて、農村はそのいづれの部面においても更生しなければならなかつたのであります。又これを裏返へして言へば、全農村の戸一戸が更生せねばならず、又夫々の部落が、夫々の町村が甦へらねばならぬといふことになります。併し衣食足つて禮節を知るといふ譬の如く、先づ農家の經濟力の恢復が最も基本的根本的な問題であり、その他の問題もこの基礎の上に立つて逐次達成せられて行くのではなからうかと考へられるのです。

所謂救農議會の召集により、農山漁村經濟更生計畫なるものが樹立され、昭和七年以來全國の農山漁村に更生運動が展開せられ、今日不充分ながら相當の實績を擧げつつあるのであります。經濟更生指定町村として、更生運動の範を示し、先頭を切つてゐるものも既に六千五百九十九ヶ町村を數へて居ります。この指定町村の數は今後次第に増加して行くことでせう。

生物に結ぶ母縁

信仰は産業
立國の基！

農村振興の女丈夫信仰談

本誌記者

本郷有町の市電停留所を横に入ると、蓬萊館と言ふ下宿屋がある。眞夏の木蔭にのどかな、涼風を呼んでゐる様な親しみ深い蓬萊館の女主人高橋ユキ子刀自を訪れて、働く女性の美しくも尊い信仰の生涯を聞いて見る。通された座敷の欄間にある

道重上人

の贈られた、佛心者大慈悲

是と言ふ懸額に、先づ親しみを覚える。佛壇には、祖先の位牌の他に、師と仰いだ高僧、偉傑の位牌がまつられてある。

ユキ子刀自の農村更生、生物一般に對する愛の生涯を、本郷十方寺の和尚から傳へ聞かれた故大僧正道重信教上人が、わざ／＼額をおくられたのだと言ふ。

若い女性の淋しみは、働く事によつて、或は結婚して母になる事によつて慰め、忘れられるものであるが、ユキさんには不幸にも子供がなかつたし家庭は生活の爲に働くには富裕すぎた。夫尙氏との間は圓滿ではあつても子なき若妻の淋しさは、ひたすらに、信仰の道へ愛の光を求めて行つた。それに、生れつき弱い體は、どんなに薬を用ひても、名醫にかゝつても所詮は効もなく、苦しみに苦しみを重ねてゐた。

生活に不自由がなければいほど精神的な苦しみが大きかつた。有閑婦人に有り勝ちな軌道をはづした生活をするにはあまりにも良心に目覺めてゐた。

かうして進められつつある更生運動の中心組織は何であるかといふと、近頃頻りに問題とされてゐる産業組合であります。

元來我國の農村には、昔から部落々々の人々がお互ひに相寄り相扶けて生活するといふ非常に美しい風習が擴がつてゐたのです。冠婚葬祭は云はずもがな、農事にも遊山にも隣、近所の人達が手を携へて行動を共にするといふ氣風が強いのであります。隣保共助の精神といふのはこれを指したものです。明治維新以來、都市における資本主義發展の影響を受けて、農村の情勢も様々な變化を生じたのであります。そして特に先頃の恐慌によつて農村全般に互つて窮乏が甚だしくなつたのであります。この時これが對策として最も必要なものの第一に採りあげられたのはこの隣保共助の精神を經濟の上に現はし、共同協力して不況を切抜けようといふことでありました。それが同存同榮をモットーとする産業組合運動として發展して來たのであります。

さて農村更生運動に關し、本紙とやゝ



然し苦しみは決してその人にとつて無駄ではない、必ず苦難の後には解決の輝かしい曙光があるものだ。若いユキ子さんの目には、今迄わびしかつた自然の姿が次第に歡喜に充ちて見える様になつた。高僧、名士の訓戒が素直にうけ入れられるうれしさが感じえられた。自然の草木、生物すべてが我がこの法悦を共にたゞへるかに見え始めて來た。

祖先が残してくれに財産を使ひ暮す自分の生活が情けなく感ぜられるにつけて、切實に自分の運命を掘り下げ開拓しなければならな

働く女性

は日本に於て賤められる。

特に上流階級の婦人等が働く事をさげすむの

は、その國を貧困に陥入れる。と言ふ新戸部博士の言葉に教へられたユキさんは村の名家と言ふ誇を捨て、働き始めた。

今迄嚴格過ぎるほどの姑の言葉も身に沁みて有難く感ぜられた。

『お主達に何が出来来る。奉公人ほどにも働けない身で主人顔をして威張る權利がどこにある。様づけで人に呼ばれるのも先祖の残した財産があればこそだ。裸一貫でほうり出されたら、旦那様だ、奥様だつて何にもなりやしないんだよ』と言ふ姑の誡めがひし／＼と身にこたえるのであつた。

沁々と姑の苦言を味ひ甘んじて受け容れられる嫁さんの心境ほど尊いものはない。

當時ユキさんの郷里新潟縣南蒲原郡田上村は湛水田ばかりで野菜物は他から買はねばならない状態であつた。農村で野菜を不自由するほど、矛盾した話はないと腐心した結果、ユキさんは女ながら畜産の奨励と、それに伴ふ野菜物の收穫を計畫したのであつた。

丁度其の頃(明治四十三年頃)縣では家畜

關聯する實例を一つ紹介してみませう。

元來信仰と農村更生運動とは餘り縁が

なささうに思へますが、實際は決してさう

でなく、密接な關係のあるものでありま

す。總べて部落事情には部落民の協力一

致が何より大切で言はば心の融合とも

言ひませうか、そこで部落の氏神が共同一

致の精神の中心として尊崇されてゐる實例

が多々あります。一年中毎日交代して早朝

参拜したり、献燈や境内の清掃を行つて部

落全民の安泰を祈願するなどが行はれてゐ

ます。これは元來一大家族ともいふべき部

落にとつて、氏神はその共同の祖先である

といふ觀念から出發してゐるのです。

これに關聯して面白い事例があります。

それは京都府下の天の橋立に近い海部村品

田部落の觀音基金の話であります。丁度

明治維新の直後、天山和尚といふ一人の

坊さんが何處からともなく此の部落に巡

歴して來て、とある小山に庵を結んでそこ

に住んでゐました、和尚はこの庵に、高さ

三尺ばかりの金箔を以て飾つた觀音様の

立像を安置して、朝夕讀經し、晝は村々を

飼育獎勵の爲に豚の種を無償で拂ひ下げてゐたので、早速それを買ひ受けて飼育し始めた。子供のないユキさんには豚の子とても我が子の様な愛情が生れて來るのであつた。

殊に自分を空しくして飼主の生活を助けてくれる尊い動物の犠牲を考へると思はず不慮の涙がこぼれるのを覺えた。或時は十四匹も仔を生んだが、十ヶしか乳房のない親豚は一樣に乳を與へる事も出來ず困つてゐたので牛乳を取つて、乳房の形を作つて仔豚に飲ませるなどの苦心を重ねた。

始めの内は一切奉公人にまかせずに自分でやつた。姑は水田ばかりを嚴重に整備して、家畜を心よく思はなかつたし、村人たちも始めはユキさんを狂人扱にして、誰もふりむくものもなかつた。勿論飼育しようとする者はない。

熱心にすゝめるユキさんに對して『人間様さへ食べねえのに、豚に食はせるものなんかあるもんけ』と言ふのが常であつた。

固い信念の上に爲される仕事は決して一度

や二度の失敗、嘲笑で妨げられるものではない。男も及ばぬ研究と、不屈の努力は、次第に豫期以上の好結果をもたらす様になつた。

こんな利益

のある仕事を貧困の村人に無理にでもさせる事が功德だと知つてから、どんなにのゝしられてもかまはず仔豚を押しつけて歩いた。筆舌で現せないユキさんの苦心のほどは、それ以來家畜で村を更生させた事實で知りえらるゝのである。

翌年隣村から始めて飼育用の仔豚を買ひに來た時のユキさんのよろこびはどんなであつたらう。以來心血をそゝいだ三十餘年の星霜は、こゝに物語るべく記者の筆はあまりにも拙ない。

知事、郡長始め縣農會の重鎮が高橋ユキさんの慰問、表賞に眞をつくしてゐるのも尤な事である。かつて新潟縣産業課長は縣畜産品評會がユキさんの村に開かれた時、『高橋尙(ユキさんの夫君で村長)にではなくユキさんに敬意を表する爲に、この村を會場に定め、貴賓の列席を仰いだのだ……』と其の並々な

托鉢して歩いてゐましたが、次第に淨財も集まつてきたので、それを以て土地を求め、これを開墾して何反歩かの水田が出來あがりました。その後十數年を経た或る日、和尙は突然部落の區長の許を訪れ、山の觀音堂とそれに所屬する土地の保管を依頼したかと思ふと再び颯然とその姿を何處へか消して了ひました。そこでこの部落の區長は代々觀音堂の管理人となることに定まりましたが、この觀音様の所有される土地を借りて耕す人々の小作料が年々の間に積り積つて數千圓になりました。區長はこれを村の信用組合に預けて置いたのです。この觀音様はやがてこの部落の守り本尊として御堂も部落の中心に移し、觀音堂が同時に村の集會所となるに至つたのです。別に堂守りも居ないが、佛壇はいつも誰かの手で清められてゐるといふ有様でした、最初この御堂即ち村の集會所の修理をお願したことからはまつて、今日では部落の人々は道路の修繕や堰の改修に何時も觀音様に願つて費用を出して戴くことになりました。又二三年前この部落

らぬ働く女性への讚美の辭をしまなかつた。

農村の母として輝かしい生涯は決して終つた譯ではないが、明治末期から大正、昭和の初期にかけて、農村の景氣は、昇る一方であつた。村の大方は養豚、養鶏、養蠶、によつて富裕な地盤を築き上げて、一先づ、安堵の胸をなで下した譯であるが丁度其の頃夫君尙氏が甥夫婦に經營させる爲に東京本郷に下宿屋を造つたのであつたが、どうしても都合で自分で經營しなければならなくなつた。働く事に二道はないと覺つたユキさんは夫の爲に住みなれた村を後に本郷へ移り住む様になつた。然し、夫君に對しての注文があつた。これは、

たゞの下宿屋

のおかみさんとして經營するのならば止めようと言ふのだ。田舎から何の頼りもなしに大東京の眞中へほうり出された學生達の、眞實の母となつて、金錢を超越した世話人としての下宿屋ならしよと言ふのである。暑さ寒さにつけて故郷を

離れた學生達を兩親に代つて守らふと言ふ子のないユキ子刀自の尊い母性愛は三十餘年農



村更生に盡した不動の信念と、生物に對する大慈悲の顯現であらう。(をはり)

に農事講習會が催された時、或る肥料會社の技師の雄辯に感心した純朴な部落の人達は、早速その會社から肥料を買つて用ひました。所が會社ではその肥料代金の支拂ひに矢の催促です。部落の人達は代金は秋になつて收穫があつてから拂へば良いと考へてゐたので大いに驚いて了ひました。そこで例の如く觀音堂で集まつて協議した結果、肥料を買つたのは部落全部の人々だから特別にお願いして觀音様から拜借することとなり、約二千圓といふ金を五分利、十ヶ年賦で貸してもらふことにしました。普通の金利は一割以上であるが、特に觀音様のことだから五分利でよからうといふのです、その結果はどうかといふと佛罰を恐れて小作田では良く働き拜借金はいよく返済するといふことです。これは實に面白い、觀音様を名義人とする部落共同財産であります。部落共有財産の造成は更生運動の重要な一要素であります、中にはこんな因縁を持つた基金もあるので

(をはり)



寺國護び及宮上波球琉

南島琉球へ

有史以來年々歳々颱風の洗禮に耐へつゝも
お伽噺のやうな王國としての存在を續けて來
た琉球。甘蔗、バナナ、アングー（藝妓）と
蛇皮線、泡盛と琉球焼を名物にもつ琉球。蘇
鐵の山、蟠踞する榕樹の巨木、バナナの林、

琉球文化の開拓者

ベツテルハイム博士

江 藤 澂 英

パイヤの木、水邊に密生する熱帯樹マング
ローブ等々、もの皆獵奇と探勝の好題材だと
は大阪商船の沖繩航路案内の書出しではある
が私の琉球沖繩への旅はかうした異國情緒を
尋ねての遊覽では元よりない。本春四月廿五
日神戸出帆の波上丸で一行七十名、琉球教田
の開拓者で三百三十五年の往昔渡明の志を
抱いて果さず、遂に琉球に留ること三年、
國王尙寧王の歸依をうけて桂林寺を開創し、
琉球産業の開拓者儀間儀常を初め多くの人々
を教化し、琉球神道記の名著を遺した、徳川
初期に於ける淨土宗の偉僧袋中上人の芳園を

憧憬して、今回法孫なる京都担王法林寺信ヶ
原良哉氏の盡力で、那覇市垣花町に袋中寺の
建立成り、落慶入佛の式が舉げらるゝに際し
その本尊佛奉遷に随伴したのである。かくて
今月廿七日無事那覇に着き、滞りなく入佛
慶讃の盛儀を終り、翌日より観光と調査に移
つたが、圖らずも廿九日の天長の佳節に當り
午後二時私は那覇市外なる浦添街道の勢理客
部落の松並木に、乗用の自動車が激突し、助
手臺に乗つてゐたことゝて頭部顔面にかなり
の大負傷をして、同市西本町なる元順病院に
收容され、二週間に亘り手術をうくるの止む

なきに至つた。しかし幸に元順病院長の鍼達なる手術に依り快癒を得たものである。

博士來島記念祭

五月二日、南島沖繩は朝から初夏の陽光が

燦々として眞紅な梯梧の花に注いでゐた。午後二時頃である、病院のベツト上に臥して頭部の痛みを忍んでゐると、曉々たる日米兩國の國歌が薫風に乗つて流れて来る。景氣のよい打上げ花火の音も混つて聞える。聞けば波の上なる護國寺畔にてベツテルハイム博士來島九十祭が今しも舉行されてゐることである。私は二十七日着琉直後波上宮に詣で、次で護國寺の門を入つた時、異様な大石碑の前に思はず停立したのであつたが、伯徳令(ベツテルハイム)なる基督教傳道師の記念碑たるを知り、その略傳を讀んで敬仰の念禁じ得ざるものがあり、改めて訪拜しようと思ひそかに期したのであ

つたが、不慮の災禍に果し得ず空しく病床に呻吟する時、今この記念祭の舉行を知つて陰ながら衷心の敬意を捧げたのである。

ベツテルハイム博士



タリーのバデウア大學を卒業して醫學博士になつてゐる。彼はエジプト軍艦の軍醫長やトルコの陸軍々醫長の榮職を歴任したが、「一人を醫するより萬人を醫するの大に如かず」と、廓然として大悟するところがあり、英國

に渡つてロンドンにて専ら基督教を修め傳道師となつたのである。かのアフリカ探検で有名な布教家リヴィングストンとは同窓である。偶々英國海軍傳道局は彼を日本へ傳道のため派遣することにした。一八四五年の九月彼は臨月に近い夫人を伴ひ、帆船に身を托して遠く東洋日本への傳道の聖旅へと出發したのである。未だスエズ運河の開通はなく、彼の帆船は波浪を越えて遙かにアフリカの南端を廻るのであつたが、ケープタウン附近で夫人は産氣づき一男子を産んだ。かくて難航數ヶにして漸く香港に着し、翌一八四六年五月二日(わが弘化三年四月六日)琉球に來た

南島琉球へ西歐科學を傳へた博士、基督教を最初に我國に傳道した博士、ベルナルト・エアン・ベツテルハイムは西紀一八一一年ハンガリのプレスベルヒ(今のチエツコスロバキア)に生れ、一八三六年二十五歳でイ

のである。荷物同様にして打ち上げられたベッテルハイム夫妻は幼児を抱えて、波の上なる護國寺畔に寓居し、支那音に依り自ら伯德令と稱した。

在琉苦難の九ヶ年

那覇港口の「波の上」は眞青な美しい海波を一望に俯瞰する疊重たる岩壁上にあり、南島第一の景勝である。護國寺畔に居を占めた彼は「波上の眼鏡」と島民から呼ばれてゐるが、西紀一八五三年ベルリ提督と共に琉球を去る迄、在琉九ヶ年彼等夫妻は事實上は禁錮同様の憂目を見たので、琉球政府や在番の薩摩役人はあらゆる壓迫を強ひたものである。

しかも彼は街頭に立つては神の福音を傳ふるに専念し、更に彼は泰西最新の醫學知識を傾倒して病者の診療と施藥に終始したのであつた。しかるに彼の身邊には常に瓦礫が雨と降り時には路上に打ち倒され血潮に染んだ事さへ珍しくなかつたといはれる。傳道と診療、

それは彼が九ヶ年間に一として缺かさぬ聖課であつたが種痘術を傳へたのも彼であつた。醫學博士であつた彼はまた傳言學者としても卓絶せる知識の所有者であつた。最も流暢なる琉球語で以て説教傳道を試みてゐたが、進んで彼は聖書の琉球語譯を企圖し遂にこれを完成してゐる。安政元年ベルリ提督が浦賀に條約を結んで歸航の礪、薪水の補給を得べく琉球に寄港せし際、彼はベルリ提督の通譯者として活躍し、豫て完成せし琉球語譯聖書の出版を希念して、ベルリの艦隊に便乗を乞うてアメリカに去つて行つた。米國に渡つた彼は南北戦争には、イリノイス州の義勇軍に軍醫として従軍し、戦後は専ら米國に在つて琉球日本の紹介に努め、遂に一八七〇年（明治二年）二月九日、ミゾリー州のブルックスフィールドで五十九歳を以て逝去してゐる。彼の琉球語聖書は米國で出版せられ、現に世界の稀觀書となつてゐるが本邦に存するものは僅かに五冊であるといふ。

護國寺畔の記念碑

那覇市波の上なる護國寺畔には、彼の偉勳を千古に傳ふる一大記念碑が聳立してゐる。

去る大正十四年五月二日（西紀一九二七）彼の來島八十年祭に、彼が生前因縁の深かつた、ハンガリー、チエツコ・スロバキア、オスターリ、イタリー、トルコ、ギリシヤ、イギリス、支那、アメリカ、琉球の十ヶ國から持ち來つた石を疊んで、その上に記念碑が建て

人ルニテニ語
呼ズ此移譯
初ノルヲ西
波ノ地ヲ企
上基ニ留テ
ノ教三來ル
漢新西ヤト
名鏡教曆約
伯言宣千ヲ
德フ師百臨
令ニ四寺ニ
(PETELING) 彼ハチ六十ニシト
日本五聖
ニ来テ二月後書
朝醫日護琉
セ術始國球

書聖之語琉球譯令德伯

節四十第章四傳翰約

ヨシラトガフテベスニソアイテエタユソエ
トカワタマンカワカデマツイヤスムノホル
ナトソイニカナノクニヤツミルイヤキラ
ンモルテイキワチノイノシナリギカルイ

られ、略傳と「伯德令譯琉球語之聖書、約翰傳第四章第十四節」が刻まれてゐる。九十年前彼が萬難を排してこの地に來り、眞に不惜身命の大勇猛心を以て、忍受不悔の精進を續けた傳道者として、この聖業を思ふ時、この記念碑は燃然たる光輝に包まれてゐるかの感じがする。一、人を醫するよ

り萬人を醫するの大」を悟つて、醫療と傳道に献身した彼の聖業こそは所謂「仁愛救済」といひ得よう。驟の雨の注ぐ中に立つて神の愛を説いた彼の姿には自ら合掌せしめられ、しかも彼は在琉九年苦難の裡に終始しながら彼の日記には一言の不平も記されてなく、半句の不満も述べられてないといふに至つては、彼が眞の傳道者として崇高な人格者だつたことが偲ばれる。(カットは記念碑拓本)

令孫フラット女史

今次のべ博士來島九十年祭は、南島民が文化の開拓者に捧ぐる感激の盛典であつた。殊にこの式典に列席するため遙々とアメリカから渡來した一女史があつた。私が那覇に着いた四月廿七日の同じ朝、鹿兒島航路で來朝したベス・フラット夫人こそ、實にべ博士の愛孫で女史の父君こそは、實に九十年前、べ博士が東洋への航海中アフリカの南端附近で船中で生れたのであつた。女史は本年五十五歳、

四十年来憧れの東洋日本の琉球へと、祖父の記念式典に列すべくルーズベルト大統領の親書を携へて單身やつて來たのであつた。三重苦の聖女ヘレンケラー女史と同船横濱に上陸したフラット女史は、直ちに陸路西へ西へと只すら琉球への憧憬のみで獨旅を續けて來朝したのであつた。私が今回負傷入院中の元順病院仲地院長の宅に女史は宿泊して、記念式典に列し島の人々の心からなる歡待に感激してゐた。女史は幼時いつも父から祖父と共にありし日の琉球の機々を物語られ、十四五歳ともなつて女學校に通ふ頃からは、祖父の日記を讀むのが無上の楽しみであつたといふ。細々とべ博士の書き綴られた日記は、青波の美しい琉球の海、蘇鐵の茂る山々の風情、百合の花の高い香り、人情の豊かにも親切なところなど、宛然地上の天國の如く琉球の自然と人情が讚美せられて、そこには微塵の不満も不平も洩されてない。女史は暇さへあれば祖父の日記を繰いては、(四十九頁へ續く)

短歌

興謝野晶子選



一等 朝鮮 蟹江八年坊

おろかなる低きこの身となしつつ

もみ佛やどる器とも思ふ

(評) その境地を遺憾なく云ひ現されてゐるのに敬意を表したく思ひます。

二等 静岡 岡澤田 岳潤

迎へ火を人々焚けば竹林のほのか

にあかく浮かび出でけれ

(評) 田舎の盆の風景が何の誇張もなく寫し出されたのが宜しい。

三等 飯田 中山 弘

旅の雨なほも降りつつ静かなり奈

良のみ寺を今日し巡らん

(評) 古都の雨の日の旅情にも、御佛を内に持つ人の翹きが透つてゐる。

東京 三野輪江雪

大雨の晴れて明るき夜となれば山

を脊にして月見草咲く

京都 永田 七郎

うたがひもはた妄想も其のままに

凡下のわれは法悦に生く

小倉 益田 山彦

裏町の溝のほとりにつつましく白

粉の花咲ける夕ぐれ

鹿兒島 藤崎 耕我

影のごと我が身に添へるみ佛と思

へば嬉し寝ても覺めても

滋賀 福島 亮忍

月もなく星影もなき闇を侘び呼び

あふ如し田の蛙ども

新宮 奥村 映水

ゆふぐれに歸る帆あれどわが妻は

星の世界へ行きて歸らず

山寺の静けき夜半にただ一人みほ

とけ拜む幸ひを知る

東京 井上 海堂

願くば生死を超えて雄々しかれみ

國守ると遠く行く君

千葉 高橋美矢子

涼しきは青田の上を打ち越えてわ

が伏す蚊帳をゆるする朝風

足利 飛田 一念

久しくも病めるわが子は折節に父

がたのめる彌陀の名を云ふ

大阪 小山 文二

月白く夕空にあり高々と梢の上を

飛びかふ燕

北海道 花田 順往

はすの葉に物をそなへてうらぼん

のみ魂祭ると念佛しにけり

東京 山田 章子

大君のみことかしこみ太刀とりて

出で立つ君を送る今日かな

東京 船越 正達

夏草の繁みに立ちて月待てば誘ふ

如く蟲の音ぞする

北海の夕となりて浮ぶかな墨繪も

て刷く半島の影

東京 小泉 妙春

山寺の門をしぐれば木蓮の花地に

落ちてしづかなりけり

大阪 橋本 花汀

良き父とやさしき母に手をとられ

中に歩める兒のめでたけれ

山梨 伊藤 久次

嫁ぎゆく君にわが云ふしかすがに

歌詠む術を忘れるなゆめ

會津 無名

たまさかに休めと云へる母上の言

葉嬉しみ今日も働く

歌壇・俳壇投稿規定

歌壇、俳壇への投稿は一

回各三首づゝとし、官製ハ

ガキに楷書ではつきりとお

書き下さい。浄土編輯内各

係宛のこと。

一・二・三等當選者へは記

念品を御送りすることにな

つてゐますが、從來の當選

者で御送附洩れの方は至急

その旨御申越願ひます。



なおは かいだろと 蟻さん

大戸喜一郎

夏のあついお日さまが、カンカン照つてゐました。ポチはお玄關の石のうへに、ゴロリ横になつて、ながい、まつ赤な舌を出して、ハアハアいつてますし、タマはお勝手の風とほしのいゝ縁側のうへで、ときどき、ほそい目をあけては、ウツラウツラ、ねむつてゐまし

た。

ほんとに、まつびるまの今ごろ、なに一つ、あつくつて、からださへ、うごかさうとはしないのです。道ばたの三角かへでは、青い葉っぱをダラリたれてゐます。お湯やさんのえんとつだつて、いつもの元氣はなく、煙一つ

はきません。

このごろは、まい日まい日、こんなお天気がつづいたのです。

「雨がふれば、いゝなア」

あるお家の、物ほし臺のうへにのつけてある、かいだろの小母さんが、さう口にだしていひました。

春になると、まい年、きれいな花をさかせる小母さんの鉢は、きのどくに、すつかりひあがつて、カラカラになつてゐるのです。じまんの青い葉っぱも、ダラリ、たれさがつて、

子昌 水野・あしさ

このまま放つておかれたら、それこそカラカラになつて、おちてしまはなければなりません。

ども、かいだうの小母さんは、思ふさま、水をのんで、すっかりげんきになつてゐました。

ところが、小

ところが、小母さんが、さういつたとたんに、ひやつこい風が、サーツとふいてきました。

「オヤ、夕立が来るよ」

かいだうの小母さんは、きふに、げんきな聲をだしていひました。

まつたく、風がふいてくる方を見ると、まつ黒な入道雲が、

ムクムク、ふくれあがつてはしつてゐます。それが、みるみる

大きくなつていつて、しまひには、空一めんをつゝんでしまひました。

やがてのこと、大つぶの雨が、サーツ

と、ふつて來ました。風さへ、出てきました。

一時かんもたつと、夕立は、すっかりやん

で、また、お日さまがてりだしました。けれ



母さん

は、じぶんのからだをはひまつてゐる、小

な蟻さんをみつめました。

「オヤ、蟻さんですね。めづらしい、どうしてこんなところへ、きたんです。」

「ボク、どうして來たんだか、知らないよ。」

「まア、ではお家はどこなの？」

「わかんないよ」

「ぢや、お家へもかへれないわね。」

「わかんないよ。」

かいだうの小母さんは、氣のどくさうに、小さな赤い蟻さんをみつめました。蟻さんは、まだ今年うまれたばかりとみえて、もう泣き顔をはじめました。

「かはいさうに。おなかもすいてるでせう。」

「あゝ、とてもすいてるよ」

「さう、ぢや、小母さんがご馳走してあげませう。さ、ホラ、こゝんところ」

小母さんは、さういつて、右がはの枝をゆ

すりしました。生きかへつた青い葉つばが、サ

ラサラとなりました。

「わかつたでせう。こゝへいらつしやい。お

いしいご馳走がありますよ」

ちひさな蟻は、右がはの小さな校のところへゆきました。すると、そこに、おいしさうな木の汁が出てゐました。蟻さんは、むちうになつて、小母さんのごちそうを、たべました。

かうして、かいだうの小母さんと蟻さんはすつかり、仲よしになりました。東京のまんなかのことです。どこへいつたつて、蟻の住めるやうな土は、めつたに見つかりません。それに、ひとりぼっちになつた小さな蟻さんは、まだ大人になりきらないのです。ですから、やさしいかいだうの小母さんが、
「ぢや、もつと大きくなるまで、わたしのところにいらつしやい。」

さういふと、喜んで、その日から、小母さんのやくかいになることにしました。

ひるまは、ものほし臺の上を、あるきまはります。おなかがすくと、小母さんが、おいしいごちそうを、くださいます。夜がくると、校のあひだに、ねむります。

いく日もいく日も、日がたつていきました。

小さい蟻さんは、からだこそ小さいけれど、もうすつかり大きくなりました。そして、今では、一時かんも、二時かんも、物ほし臺から、どこかへおりていくやうになりました。

ところがある日のこと、小さい蟻さんは、大げんきでかへつてくるなり、

「小母さん、お友だちを見つけて來ました。」

といひました。

やつぱり小さい蟻さんです。

「まア、よく來てくれました。」

小母さんは、さ

ういつて、ふたりに、おいしいごちそうを、下さいました。

ところが、蟻さんはふたりになると、今までのやうに、小母さんに話しをしなくなりま



した。それどころか、小母さんの、だいいじな根もとに、穴さへ、ほりはじめたのです。

「まア、蟻さん、そんなことをしてはいけません。」

「うゝん小母さん。巢をつくるんだよ。二人でお家をつくるんだよ。」

「いゝえ、ダメダメ。そこに巢をつくると、あたしがこまつてしまひます。それより、お隣りに、けしさんのお家があいてます。そこへ作りなさい。」

「それがね、だめだつて。だつて、けしさんはもう枯れてるでせう。あんなところへ巢をつくつたら、食べるものもないし、それにあつくてしやうがないつてー」

さういつて、せつせと穴をほつて、とうとう小母さんの根もとへ、きれいな巢をつくつてしまひました。

けれども、このへんには、花も、鉢うゑの草花だつてありません。蟻たちは、たべものがなくなるとかいだうの小母さんの、だいいじな根をかじつては、生きてゐました。そのた

びに、小母さんは痛くて、からだを、ブルブルとふるはしてゐました。そして、だんだん、だんだん、小母さんのからだは弱つていきました。もし雨でもふらなかつたら、それこそ、こんどは、小母さんは、枯れてしまはなければなりません。

ある夕がたのことでした。

久しぶりに、つよい風がふいて来て、大夕立が來ました。それはそれはつよい風で、小母さんは、もう、立つてゐることもできませんでした。そしてとうとう、倒れてしまつて、スツボリ、鉢からぬけだしてしまひました。あくる日の朝でした。長いあひだ見えなかつた可愛いお嬢さんが、ものほしに上つて来て、かいだうの小母さんを見つけました。

「まアかはいさうに。お爺さま、かいだうが倒れてゐますよ。」

「どれどれ」

おちいさんも上がつて來ました。

「まア、おどろいた。おちいさん、これ何アに？」

「おゝ、蟻の巢だ。白いのは卵です。どれどれにくらいやつだー」

お爺さんはさういつて、スツカリ蟻の卵をふるひおとすと、

「さア、花子さん、これをごみ箱へすてておいで」

蟻を除く法

蟻はよく働く虫ですが、甘いものに一つばいにたかつてしまつたり、木を食ひ荒したりしてほんとうに困ることがあります。さう云ふ時には、先づ巢をみつけて、その中に生石灰を振り撒き熱湯を注ぐか、アルコールに溶かして、水を混じて穴に注ぐかすると効果があります。

さういつて、かいだうを新しい土をもつて來て、うゑかへてくれました。

かいだうの小母さんは、またひとりぼっちになりました。けれどもまい日お嬢さんがお水をくださるので、どんどん元氣になつていきました。おしまひ。

俳壇

大回耳動子



北海道 長尾 了圓

大露の道おしてゆく登山かな

評 大露の道おしてゆく登山かな
我が秩父の最高峰、金峰山に登るべく、大日岩にさしかゝつてゐる折の事であつた。岩と岩との隙間に露をひかぶさつてゐる石楠花が、しとどに露を含んでゐる私の登つて行くのを待ちまうけてゐるかのやうに、とりついて來た。私は驚るゝやうに濡れて了つた。
こんな様な光景を想像して呉れたなら此の句の解釋は容易であらうかと思ふ。「大露」は此處では大きな露の玉の深山降りてゐると位に解すべきである。「おしてゆく」も登山の状態を説明して余りあると思ふ。

下 關 關野 孫平

行水や聖き裸子つぎに

評 「聖き」がよい。眼に入れても痛くないと云ふやうな愛しい子達を想像させられる。只此の句には類句がある。「行水や役にもたぬ子つぎに」。「演人」と云ふのである。「役にも立たぬ」は面白い見方ではあるが此が興味本位であり、品を落してゐる。「聖き」は如何にも神聖な感を與へられる表現で合掌したくなる。が前のやうな類句のある以上、其の價値は少なからず減殺せられなければならぬ。斯うした事から句はだん／＼六ヶ分だけで發見(創造)し得た特徴を句にし

たものでなければならぬ。
何か發明して特許權を得るつもりで、其の位の熱意で作句してほしいと云ふことになる。
青 森 高松 秋水

朝顔の蔓吹く風に花ゆれて

評 朝顔の蔓吹く風に花ゆれて
花が蔓にひかれて揺れてゐると云ふのである。朝まだきの静けさがしのばれる。此の句にも前の句程ではないが類句句はある。「鳥瓜蔓にひかれて下りくる」温亭と云ふのである。
一寸横道へ入るが、此の句の示す如く故郷亭氏は誠に圓滿な人格の所有者で此の點明立庵の庵主神林時庵人氏に類似してゐる。俳人は何よりも人格を養成しなければならぬと思ふのに、之に意を用ひてゐる者の甚だ少ないやうなので特に書き添へた次第である。

樺 太 鹽塚 哲舟

海鳴の親しきものに夏の月

夕涼おの／＼團扇もちにけり

花氷柩を圍むお通夜かな

飯 田 中山 弘

文疲れの心に遠き花火かな

姫路 内海 二音

青芒深く茂りて無縁塚

會 津 齋藤 華舟

蠅たゝく老僧しかと在らせられ

北海道 竹岡 昇全

山鳩のほろ／＼啼いて夏の雨

大 阪 馬野 鼓水

眠る子の足にかゝりて夏蒲團

下 關 末永 峰月

湖の夏の木立は月とあり

東 京 安良岡野風

夕立の露のおもたきダリヤかな

東 京 三野輪江雪

我が汽車の青田に引ける影のよし

大 阪 六尾 竹雄

下足番桔梗一輪挿してあり

大 和 大橋 諦侃

掘り身の且涼しき念佛かな

奈 良 大橋 溪林

泥足の乾く晝寝や田草取

津久見 石堂柑山生

蟪蛄の居るまゝ菊の移植かな

小 倉 益田 山彦

福岡 九上ユタ子

露雨の枝垂れし竹にかゝり居り

山 口 長岡 見地

泳ぎ子の溺るゝしぐさしてゐたる

新 宮 奥村 映水

若竹の影のおどれる燈籠かな

東 京 中川 夜雪

炎天の路を歩きて蝶生くる

同 伊藤 三瀧

豊饒やまろびて起る漁師の子

神奈川 光 石

夏の川鰻に沿うて流れけり

東 京 金 之 助

公園を抜けて戻りぬ夏の月

宮 城 庄司 香月

行軍の汗しぼりある兵士かな

中五條 田村 湍水

初夏の陽の頭上にあつく苺摘む

東 京 木村 華風

秋茄子小さく成れる新居かな

同 間宮 凍石

一人子の線香花火さゝやかに

東 京 矢島 市丸

青芒雲美はしく流れけり

神奈川 永田石筍子

水あびて日だるく歸る青田かな



筆・隨・仰・信

念佛

森脇孝之

實 踐

『選擇本願念佛集』と云ふ書物がある。

法然上人の名著で、一宗の羅針である。

その書物の冒頭に、

『南無阿彌陀佛、

往生の業には、念佛を先と爲す。』

と、宣言されてゐる。

何と云ふ味のある言葉であらう！

文句はないのだ。

唯稱へて見るだけだ。

『少し佛教を研究して見ようと思ふのです

が、どんな物を讀んだら好いでせうか？』

と、折々眞面目に訊かれることがある。

だが、その度毎に當惑をするのだ。

解り易い物がないからだ。

ピリツ！ とした物がないからだ。

假令あつても讀むだけでは駄目だから

だ。

聞くだけでは駄目だからだ。

『聞くとも雖も、信ぜざれば聞かざるが如く、

信ずとも雖も、行ぜざれば信ぜざるが如

し。』である。

砂糖の味は、嘗めるに限る。

宗教的眞價は、机上の空論ではない。

實踐的體得だ。

問答無用だ！

行つて見るのだ。

稱へて見るのだ。

でなかつたら念佛は枯渴し、乾燥する。

效果的行法

處が、

『幾ら稱へたつて同じことだ。』

と云ふ者がある。

成程、大抵はそんな事かも知れない。

稱へる暇があつたら、一針でも縫つたら

好いだらう？

鍬一でも耕したら好いだらう？

一ページでも讀んだら好いだらう？

念佛なんか稱へたことのない者よりも、

始終稱へ續けてゐる者が、却つて怒りつぽ

であつたり、愚癡つぽであつたりするやう

な事もある。

だから、ロシア人ではないが、

『寺へ詣る暇があつたら、科學の研究をし

ろ！ 神の不思議を信ずるよりも、電氣の不思議を信じろ！！』

と云ひ度くなるのであらう。

だか、それは稱へ方が悪いからだ。

五分には、五分の變化がある。

十分には、十分の變化がある。

生理的に變化がある。

精神的にも變化がある。

行れば、行る程變化がある。

背骨を眞直にし、端坐をする。

膝頭は、ゆつたり開けたが好い！

男なら五六寸開ける。

女なら三四寸開ける。

肩を張つたら、肩が凝る。

肩の力は落すが好い！

兩手は終始一貫合掌をする。

ピッタリ合せる金剛合掌だ。

合掌は、兩乳房の眞中に置くが好い！

木魚を叩けば、片手だけでも胸に置く。

これだけでも、ゆつたりする。

聲を出すには腹からだ。

始はゆつくり、自然に早く。

と云つても、早過ぎぬやう！

始は低く、自然に高く。

終始一貫堂々と稱へるのだ。

最初は十分間位でも好い！

馴れたら一時間でも、二時間でも好い！

行れるだけ行つて見るのだ。

これ位に徹底した深呼吸はないと云ふ。

呼吸機作用が旺盛になるからだ。

呼吸機作用が旺盛になると、心臓の作用

が旺盛になる。

心臓の作用が旺盛になると、血液の循環

が順調になる。

血液の循環が順調になると、胃腸の消化

が旺盛になる。

胃腸の消化が旺盛になると、頭腦が明晰

になる。

精神が明朗になる。

意志が強固になる。

無論それだけが目的ではないのだ。

それは不求自得の御利益である。

宗教的念佛生活の副産なのである。

念佛の體驗の初歩なのである。

唯それだけでも、念佛の生活に、何の變

化もないとは云へないだけである。

『學生骨になりて、念佛や失はんずらん。』

これは法然上人の誡めだ。

學者はある。だが行る人がない。

文句はない。行つて見るのだ。(了)

南無阿彌陀佛といふは別したる事

には思ふべからず。阿彌陀ほとけを

たすけ給へといふことばと心得て、

心には南無阿彌陀佛と唱ふるを、三

心具足の名號と申すなり。

佐藤春夫述・中島松二畫

あまりに退屈で仕方のない時には岡の屋のあたりを通る船を眺めては、船の後に残る泡の消えたり現はれたりするのを見て人間の運命の果敢なさを考へたりする事もある。又古人の瀟沙齋が行つた所の風流を眞似て歌を詠んで見たりするのである。又夕ともなつて夕風が桂の樹にあたつてさや／＼と樹の騒ぐ時には潯陽江の夕景色を想つたりするのである。時には桂大納言に眞似て「秋風」と云ふ曲を琵琶で弾いたすると松風の音がこれにまるで和する様に聞えてくるのである。「流泉」と云ふ曲を弾くと谷間を流れる水の音がこれに和するかの様に聞えて来るのである。私の琵琶を弾する技能は決して上手であるとは言ひ得ないのであるが、誰の爲に弾くと云ふ事もなく、唯自分で弾いて自分で楽しむのだからこれで充分なのである。自分はその曲を弾いて爽かな氣持になつて落ち付いて自分の生きてゐる事を楽しみ、山の孤獨の淋しさを慰められ、ばそれで結構なのである。

草庵から少し行つた山の麓に一つの小さな小屋があつてそこには山番の人が住んでゐるのである。そこには一人の子供がゐて、その子供が時に私の庵を訪ねて来て私と話し合ふのである。まあ私の庵の唯一人の客人と云つても好いのである。話す事も別段に無く、それかと云つて爲す事もない時にはこの子供を友としてその邊の山を逍遙するのである、その子供は十歳で私は六十の坂を越



通俗才人記



してゐる年寄ではあるが、年こそ違つてゐるけれども二人で山を歩いてお互に楽しむと云ふ事には少しも差しつかへはなく、全くの好い友達同志なのである。ある時には山を歩きながら草花を取つたり、岩梨を取つたりするのである。また時には零餘子を拾つたり、芹をつんだりする時もあるのである。そんな事にもあきた時には山麓まで行つて田にある所の落穂を拾つて穂組を造つたりするのである。又あまりにお天氣の好い和やかな日には峯に登つて見て、遠く古里の空を眺めたり、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽東師等の邊を見渡したりするのである。かうした景色の勝れた山々は誰と云つてこれを専有する人がないので、心一杯に楽しむのには何の障りもないので眞に心楽しい事である。心が朗らかであつて少しも歩き疲れると云ふ事のない時には遠くへ行く事もあるのである。そんな時にはすみ山を越えて笠取を過ぎて行つて岩間の神社に参詣をして石山にもお参りをすることになつてゐるのである。もう少し遠くの方にあ

る粟津の原に行つて古の蟬丸の住んだと云はれてゐる假屋の廢墟を訪ねて蟬丸の靈を慰めたり、田上川の彼方にある所の猿丸太夫の墓所にお参りする事などもあるのである。かうした遠出の歸りには季節々々に従つて春は櫻の花の小枝を折り歸り、秋は楓の一枝を折り歸る。又は一束の羊齒を、一籠の木の實を取つて歸つて佛様にお供へ申したり、又自らの食料にしたりするのである。

月の美しく牙え渡つた夜には、月光美しく射す窓邊によつて昔お互に付き合つた古い友達のことを思ひ出しながら、悲しげに月に叫ぶ猿の泣き聲を聞いたたりすると思はずも涙の眼に浮ぶ事さへもある。

草叢にゐる螢の灯はまるで眞木島の炬火ではないかと思はれるばかりに澤山谷間に輝いてゐて私の淋しい心を慰めてくれるし、又曉方の眠りを覺す曉の驟雨は何だか木の葉を吹き散す嵐の様に思はれたりするので、何だか物淋しく、その音に聴き入るのである。

ほろほろと鳴く野の鳥の啼き聲を聞くにつ

けても今の一聲は父の聲ではなかつたか、それ共母の聲ではなかつたかと疑つて見たりして昔、父母の居ます頃の生活を懐しく思ひ出して見たりするのである。こんなに山深く住んでゐると同じく山深くに住む鹿などが馴れ馴れしく庵の近くまでやつて來るのを見ても自分がどれだけ俗世から遠く離れて暮してゐるかと思ふ事を示された様に思はれて何か知ら淋しい様な感も抱かれたりする事もある。

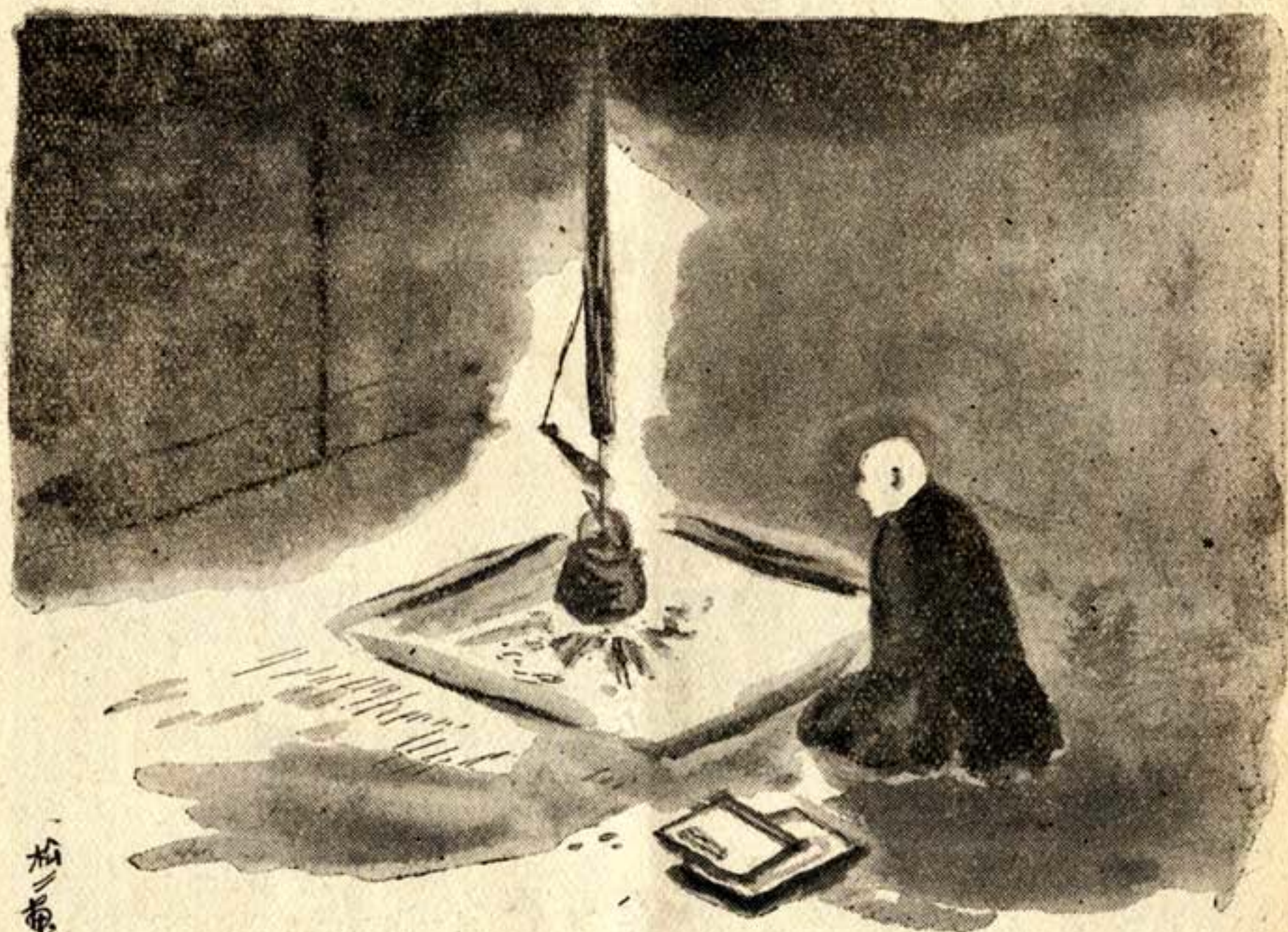
六十餘りの老境に入つて見ると夜の眠れない事が時々にあるのだがさうした時の唯一の楽しみは炭火をかきおこしてこれに暖まるのが何よりである。かうした時には炭火でも大切な友達になつてくれるものなのである。別に恐ろしい事のあると云ふ程に山奥でもないのであるけれども陰氣な梟の鳴き聲を聞いたりとすると何だか心淋しく哀れさをしみゝと感ぜさせられて感に堪へぬ事もないではない。

この様に山の中の景物は春夏秋冬それな

に面白味のあるものを與へてくれて中々に盡きるものではない。まして私達よりも内省の深く、知覺の鋭い人々であつたならば私の感じた物以外にもまだ／＼面白味のあるものを發見してこれを樂しむ事が出来たであらうけれども私の様なものでは以上の様なものにしか樂しみを見出すことも出来ず何だか身を哀れに思ふのである。

私がかうやつて山の中に入つて住む様になつてから早や五年の月日が立つてしまつた。月日の經つにつれて庵も所々が破れ損じてゐるし、軒下には落葉が深く積つてゐるし、そしてその葉は朽ちるにまかせてあるのだ。又苔が床の上に一杯に生える様にさへなつた。

京からの時々風の便りに貴い身分の人達の多くが亡くなられたと云ふ事を聞くことがあるのだが、それ



松ノ庵

と同じ様に身分の賤しい人々も澤山に死んでゐる事であらうと思はれる。

多くの住家が度々の火災の爲に焼け失せたと云ふ話を聞くのであるが、この賤しい自分の住家だけは火災にも遭はずまことに平和なものである。どの様に狭いものであつた所で夜の寢床はあるのだし、晝の書寫をしたりする所もちやんとあるのだから、自分自身が住む上には何等の不便も不足も感じないのである。やどがりが小さい貝の中に住むのもきつと自分の身の程を辨へての事で、やどがりには小さい貝が相應した住家なのである、又みさごが人を恐れるのあまりに浪の荒い海岸にゐて人を近づけないのである。やどかりやみさごの様に自分は自分なりの小さい住家に住み、さうして世の中の果敢なさ、自分の運命の哀れを知つ

て世を離れてかうした山の中に住み、富も求めず、位も求めずに、まして俗世間と交際ある様な事もなく、みさごや、やどかりが自身だけの平安を樂しむ様に唯一人で何の不安もなく暮してゐるのである。

總て世の中の人々が家を建てる目的はほとんど自分自身の爲では決してなく、親の爲だとか妻子の爲だとか、他の家族の爲に建てると云ふが普通である。又は他人への見榮の爲に建てたり、主君や、師匠の爲に建てたりするものなのである。財産や寶物を入れる爲に建てたりする事もあつて決して自分だけの爲に建てると云ふ事はないものなのである。所が現在の私の建物は純粹に私自身の爲に建てたものなのである。人の爲に建てると云つた所で私には既に兩親はないのだし、妻や子供すらも無い事だし、又一緒に住む様な友達もなく、使用人も置いてないのだし、全然今の境遇では家を建てゝやる様な人は居ないのであるから結局自分自身の爲に建てることになつたのである。現在の世の中に於ては人の友

達になる爲には先づ何よりもお金持でなければならず、そしてその人になれ親しむと云ふ事でなければならず、必ずしも情に深くて素直であるとか云ふ事は必要とされないのであるからこの様な輕薄な友達付き合ひをする位ならば、それよりも山の中に居て自然を友とし音楽を友としてその日／＼を暮らすのがどれだけに好い事か知れやしないのである。

又人の使用人にならうとする様な人々は先づ給料の多い事を望み、何でもお金になる所へのみ行きたがつてゐる始末で、可愛がつて情けをかけてやつて養つてやつてゐても給料が少かつたりすると決してそこには使はれてゐる事は承知しない有様なのである。これでは人を使つて却つて苦しまなくてはならないのである。そこで使用人を使はずに自分自身を使用人にするのが一番に好い事なのである。多少はさうすれば厄介な事もあるけれども人を使つて苦しむよりはどれだけ好いかも知らないのである。歩かなければならない事があれば自分の足で歩く事にするのである。

さうすれば多少は苦しい事ではあるが、牛車や馬車に乗つて氣を使ふよりはどれだけに樂であるか知れないのである。私の身は二つの使用人を兼ねてゐるのである。一つは手でこれは召使の用をしてくれるのだし、一つは足でこれは乗物の役をしてくれてどちらも私を充分に満足させてくれるのである。かうした爲に自分の體が苦しくなつて來たら使ふのを止めて充分に休ませて、又丈夫になつたら使ふことにしてゐるから決して無理をするとか云ふ事はないのである。だるくなつて歩くのも、仕事をするのも氣が向かない時でも何も氣に病む事はないのである。まして毎日働いたり、歩いたりすることは此の上ない身の養生となる事なのである。だからどうしても何もしないで怠けてゐると云ふ譯には行かないのである。

歩いたり、自分の身の廻りの事を他人の手を借りると云ふ事は明かに一つの罪惡でなければならぬのである。衣食の事に就ても同じ事が言ひ得ると思ふ

のである。藤の衣、藤の夜具と云つた様なもので着るものは充分に間に合ふのであつてそれ以上のものは不用品なののである。又野邊にあるつばなや、峯にあるいはなしの實などを取つて食べてゐればそれで充分に生きて行けるのであつてそれ以上は又不用品なのである。他の人々とは全然交際しないのであるからどんなに貧しい身なりをしてゐた所で誰も何とも言ふものでもないのだし、又食物の至つて乏しい山の中であるのだからどんなにまづいものでもおいしく食べられるのである。かうして今の自分の生活を書いて見るのは何も他の富める人々にかうした暮らしをせよと云つて教訓するのではなく、唯自分がまだ俗世を捨てずに俗世に住んでゐた時の生活と今の生活とを比較するために書いて見たまでの事なのである。

この世の中と云ふものは心の持ち方一つで苦しい世の中にもなり、楽しい世の中にもなるものである。精神がもし安心立命の境地に立つてゐなかつたならばどれだけお金があり

立派な住家に住んでゐてもそれは何もならないのであつて、やはり苦しい暮らしをしなければならぬのである。今自分はかうして淋しい山の中へ来て唯一間しかない所の狭い家に住んでゐるけれども精神は眞に平安で、毎日々々を非常に楽しく暮してゐるのである。その上にこの様に粗末な住家だけれど私はこの住家をこの上もなく愛してゐるのである。

たま／＼都の方に出て托鉢をするのであるが、そんな時には自分がこんな乞食坊主になつた事を恥しいとは思ふ事があるのだけれども、この小さな自分の住家に歸つて見ると、俗世の人々が浮世の名利にのみ執着して暮してゐるのを考へて見るとそれらの人々が哀れにさへなつて來るのである。が私がこんな事を言へば人々はお前は夢の様な事を言ふと言ふかも知れないが、しかし魚や、鳥の生活を深く考へて見ると好いのである。魚は一生を水の中に暮して少しも水にあきることがない、又鳥はその一生を林の中で送ることを願

つてゐるのである。この鳥の氣持や、魚の氣持は魚自身、鳥自身でなくては知る事が出来ないものである。私もその様に山の中で世を離れて唯一人住んでゐるこの心持はほんとにさうした生活をやつて見なくては、解るものではないのである。山の中の閑居の楽しさ、淋しさ等には俗世では味ふ事の出来ない深い味ひのあるものであつてほんとに實踐した人でなくてはこの味は解るものではない。この味は高位高官に登るよりも、お金持になることよりも數等増して私には好いことであり楽しい事なのである。

さて私の一生ももう餘命幾何もなくして死出の旅路に出なくてはならないのであるが、もう現在では何も今更に嘆くことも、悲しむ事もないのである。佛様の御教は何事に對しても執着心を持つなとあるのだが、今こうして心靜かに楽しく住み得るこの山の中の草庵を愛することさへ一つの執着心の現れで罪惡なのである。私は佛様の世界から見れば何等價值のない楽しみをこたく／＼と並べ立て



て無駄な時を過したものである。

物靜かな夜明け方にかうした眞理を考へ續けて行き、自分の心持を深く反省して見ると自分がかうして浮世を脱れて山中へ入つた最初の目的は何だつたかと云へばそれは佛様の道に精進しようとしてやつた事なのであるが、それにも拘はらず自分の生活といふものを考へて見ると外見は聖人の様ではあるがその心持はまだく聖人には遠く及びも付かないもので全く俗人の如くに濁つたものなのである。私の住家は昔の維摩居士の方丈の庵室を眞似て建てたので

あるが、自分の行ひや信仰の上に於ては一番魯鈍だつたと言はれてゐる佛弟子の周利槃特のものにすら劣つてゐるではないか。そしてこの原因はあまりにも貧しい苦しみをしたのでその爲にあまりに苦しんだから思ふ様に修業が出来なかつたのであらうか、又は煩惱があまりにも強かつたが爲に心が狂つたのであつたか、等と自分がどうして悟入出来得なかつたかと自問自答しても何等の答も興へられなかつた。それで唯口舌の力を借りて南無阿彌陀佛と二三度佛の御名を唱へてその加護をお祈りするまでである。

時に建曆二年三月晦日頃、僧連胤が外山の庵で之を書き誌したものである。(終り)

笑話 ぬかり無し

船の中で、
妻『貴方、何んだつて女の寝まきなんぞ着て甲板を歩いてゐるんですの、みつともない。』

夫『そりやね。船が遭難した時は先づ第一に女と子供がボートに乗り込むつて譯だろ。』



義・談・仰・信

(二)

それを思ふと、此の佛を念じ神に祈りつゝ一言一行してゐる者がどれだけあるでせう。

それが信仰心が薄いといふのです。最早、宗教の原理を論ずることは三千年來云々盡されて來て居ります。だから單に語ることでなく、自分が神を「信じ」佛の心を「體する」ことです。そして本當に人間味、生活味を打ち建てることです。

佛を體現することは、六つかしい事ではない。居る處、成す事々に如來を念じ、その「み心」に御訊ねして、そのみ心を貰ひ、其

この道

(その二)

中野 尅子

ならぬとか、如來さまの世界へ出掛けて行かんならぬとか云ふのでなく。

自分の腹の中から、いつもビヨイ／＼と如來さまに出て頂くことであつたのです。

此の「一事一事」「一步一步」に佛のみ心が籠り、如來の「み力」と「み恵」とが籠つて現はれて來るとき、此事——此の行ひが、活きた如來のみ姿だとまで感じられます。だからどんなに邪魔しようとする悪魔も、終にこれに反抗することが出來ず、必ず事が成就します。是れ眞理の力です。

世には惡が榮えて善が亡びると云ふが、そんな事はナイ。さう思ふ人はまだ、何が眞理

救はれる

といふことは、これから佛さまを捜し出さん

であり、何が眞の善であり、何が惡であるか
の見境もつかぬ人の云ふことで、眞理者には
必ず眞理が見えてゐるから、「亡びる」な
んといふことは少しも感じたことがない。だから
悲觀もなければ、落膽もない、切々として、
「如來の道」を行ひ、「我が道」を貫くより外
はないのです。他は之れを「亡び」だと思
ひ知らん、「榮えぬ」と見るか知らん。而し、
そんな事は自分に取つてはどうでもいい。自
分には眞理の外なく、いつも勝利を信じてゐ
るのです。彼の釋尊や、法然上人、其他の先
覺者の歩まれたのは、常に「コノ道」であつ
たのです。

「コノ道」は

金にならぬこともありませう。人から惡様に
云はれる事もありませう。けれど、それが
何です。時には妻からも、親からも非難せら
れる事があります。けれど、それが何です！
本當に自分が「如來様の道」を歩かうとする
時、殆んど自分以外の總ての人から誤解せら

れ、理解されぬ事が多いのです。それでもか
まはぬ。それだからます／＼「如來道」に忠
實にならうとするのです。自己が「自己の
道」を捨てぬ。それが信仰の道です。だから
孤獨の道と云へば最大の孤獨の道かも知れま
せん。それは如來さまと自分とたつた二人切
りの道、いや二人が一人になつた一人切りの
道だからです。而し夫婦の道も、親子の道
も、金儲けの道も社會救済の道も——此の道
の中から出來ねばならぬのです。

此の「唯一の道」が末の方になつては、岐
れ／＼して、時には泥棒までしていゝ無量の道
が出て來る無礙の道だから、其絶對點に於て
は、あらゆる妥協を排して孤立になる位は
當り前です。絶對に孤立して佛の「一心」に
冥合するまで逆上らねばなりません。それが
求道の歩みです。求道の歩みは

捨身道

です。總てを捨て、「一」を得るのです。
「慾を捨て、信を取る」のです。

信を獲れば小慾は、此の「信の徳」で自然
に達せられます。金が儲けたいとか、美人が
得たいとか、世間に名を謳はれたいとか、大
きな邸宅に住みたいとか云ふ事位いは易々た
るものです。病氣治しや、奇瑞や靈感、不思議
を現はす事位いは、信仰の餘興です。餘興で
す。だから釋尊やイエスは、神通や奇瑞を求
めるな、そんなものを現はしても成る丈け人
に隠せ、そんなものは宗教の至極ではない、
そんなもの位で自惚れてゐたら、それは宗
教の墮落だ、自己の墮落だと深く誠しめてゐ
られる。それが正しい宗教的修行の結果から
來た奇瑞であつてさへ、そんなものに捉はれ
てゐるなと、云はれてゐるのに、その餘の精
神治療主義の宗教や、宗教興行者に至つては
如何がはしいインチキで、我れこそ大宗教の
體驗者らしいことを吹き立てゝゐる。全く言
語道斷です。本當の信仰は、そんな「迷信」
程度に停つて居らずに、もつと／＼高い、正
しい「まことの信仰」へダ／＼求めて進む
ことです。

だから、正しい宗教——

極樂往生

の道は、樂な道でなく、苦しい道です。苦しいけれ共愉快な道です。なぜ愉快か——と云へば、常にダイヤモンドでも掘り出すように、自己の内から

「如來さま、これでよろしう御座いますか？」

「オ、ヨシ！ ソレを行へ！」

といふ、如來の「み聲」を掘り出さうとして掘り進む道であるから、たのしみです。

けれ共、常に自分の煩惱に挑戦して、戦ひに戦ひ、厭離穢土に厭離穢土を重ねて、惡魔の聲を退け、如來のみ聲に傾聴して行かうとする歸命の生活であるから、苦戦に苦戦、闘争に闘争を重ねる、心内の闘争、家族との闘争、國家社會間の闘争。此の眞理の一點よりは如何なる敵に對しても斷然戦つて行く。喧嘩や戦争の出來ぬような宗教は本當の宗教でない。それは「戦ふべき中心」がわかつて居らぬからです。宗教は一つの「闘争史」で

す。闘争に始つて闘争に終る。これが正しい宗教です。

(三)

それでは、どうしたら信仰が得られるか、それは難作もない。易い事です。

「信仰」が眼前に在つたのです。いや信仰の中に包まれてゐたのです。いや「信」の内に居たと云つた方がいゝ。

恰度、金魚が水の中に棲んでゐて水を知らぬやうに、金魚の生きてゐるといふ事は、既に其の「水」のお蔭を被つてゐたのです。だから水は探す必要のナイ位親しいものであつたのです。信ずるも信ぜぬもナイ「嚴然たる事實」であつたのです。

我々が信ずる「佛」も、此の「水」であつたのです。我々が信ずるから佛が有るとか無いとかでなく、有無を超えた「嚴然たる事實」です。

我々の「生きてゐる」のは既に、其の「み力」と「み恵」を被つてゐるからです。我々

が産れて来る前から既に「お慈悲」の方が先に有つたのです。そしてその「お慈悲」の中で生れ、お慈悲の中で死んで行くのです。だから死んだところで別の世界へ行くのでも何でも無い。盡天盡地、悉く其の佛光の輝き、其の佛力の動きであつたのです。だから自分の内からも其の佛力の活動が出て來ねばならぬ。

「オ、ソレ、出て來る。それが、それ、ソレであつた」

と、如來の活動——をハッキリ私のやうな醜い奴の内に感ずる。此の「如來」を見ずにドコに探してゐたのです。どこにも探す必要の無い位、自己以外にも、野にも山にも小鳥の歌にも、その麗しさ、そのやさしさ、その美しさ、其の強さ、その正しさが溢れ／＼出てゐる。一切は皆「如來の動き」をやつてゐるのに、自分一人だけが醜く、眞黒い心で見えてゐたから、此の「莊嚴の世界」がわからなつたのです。

今迄は、何といふ「小さな佛」を想像して

ゐたのでせう。座蒲團の下からでも出て来るように思つてゐた。それがこんな大きい活動の中に居たのです。寧ろ私の目醒めるのを待つてゐて下さつた。いや目醒めるやうに一生懸命に面倒を見てゐて下さいました。そのお蔭でなければ目が覚める氣遣ひがナイ。此の淺ましい奴が、此の儘、その救ひの内に居たとは何といふ有難い事でせう。今日からは必ず我儘を致しません。如來さま！ あなたの「み旨」に従ひまする——と初めて頭が下がりました。

眼を上ぐれば一草一木、一塵一塊に至るまで總ての物に其の「み榮」が現はれてゐる。古繩一筋散紙一枚までが皆、その「み心」で働いてゐる。遊んで居らぬ。皆悉く「如來の働き」をやつてゐる。此の究竟圓滿の世界の中で自分一人だけが眠つてゐたのです。自分一人だけが怠けてゐたのです。何といふ勿體ナイ。申譯ナイ事だ。

ヨシ！ やるぞ

これからやるぞ！ 私は、私の受持ちだけはやるぞ！ 一人前の「勤め」をやらなくでどうする。私には私の「使命」がある。今もドン／＼肚の中から如來さまの「思召し」が噴き上つて来るぢやないか。これが念佛——だ。

南無阿彌陀佛

だつたのだ。如來さま御自身のみ聲——いや如來さまが「聲」になつて生れて来て下さる「生身の御姿」これが天地の聲、正しい宇宙の動向であつた。不滅の眞理。宇宙の生命絶對無上の命法だ。此れが神だ、佛でなくて何とせよう。「名」は勝手に人間がつけたのだ、名は何でもいゝ、吾れに現はれ、吾れを活かし給ふ生命はコレだ。

政治家はコレで政治をやればいゝ。藝術家はコレで藝術を造ればいゝ、經濟家も、法律家も、科學者も、教育者も、コレより出發する外はない。コノ道を外れたら「眞のもの」は成立たぬのだ。

結局、信仰は、「コノ道」によつて坊さんは本當の坊さんになり、巡査は本當の巡査になり、百姓は本當の百姓になることであつた。アナタはどうぞ本當に「アナタ」になつて下さい。そして私は本當に「私」になります。

(三十一頁ヨリ) 夢の國沖繩、神の國琉

球、お伽噺の島國、女史の腦裡には日夜東洋への憧憬で一ぱいであつた。女史の夫君は米國加州にて銀行の頭取で、令息令嬢もそれ／＼立身したので、女史は多年の念願を満すべく來琉したとて小島のやうに所謂歡喜踊躍するのであつた。ベ博士が醫學者として、傳道者として、黎明期のわが南島に西歐の文化を傳へた偉蹟、日本琉球を米國に紹介した博士の功勳、更に祖父の遺跡を慕うてはるばる渡海來琉したブラット女史の美しい心情、三百年前の琉球教田の開拓者袋中上人の芳躅を仰慕して渡琉した私は、異郷の病舎に病んで、床上に臥して冥目して偶々ベツテルハイム博士來島記念祭を偲び、彼が歩んだ聖なる道に滿腔の感激と追慕を捧げたのである。

談 相 仰 信

中村辨康師擔當……

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと誌上匿名は可)

靈魂の有無

問

「東光」孟蘭盆號、信仰問題に靈魂は在るか
の間に「幼稚な思想にはハツキリ存在を認めて居るが、佛教では個人的靈魂は認めない。死生は唯業の因果に依て相續して行くものなり」と斷定して居ますが、然らば委有佛性は其の業なるものに具備して居るものですか、甚だ不審千萬なり。淨土誌上に具體的御示教を乞ふ。

答

(北海道 大島)
靈魂と云ふ言葉の内容如何に依て有るとも無いとも云はれます。佛教の悟入の上から申せば一切の固執を破る爲に、支那で云ふやうな魂

魄と云ふやうな「固り」を認めない譯ですが、少くとも現在私達我執の取れない者に取つては常に間斷なく個人的靈魂を認めつゝ生きて居る譯です。もしさうでなかつたら、追善など云ふことも意味をなさない事になります。また往生とか成佛とかへの過程に何う解釋をつけて行つたらよいか、譯が分らなくなりました。

また凡ての現象が「縁」なくして有り得ないことは申すまでもありませんが、其縁の作用に依つて色々の業をなしつゝ、相續的に現象して行く「私其のもの」は私の生命の本據でもあり、私の魂でもあります。そして此の魂の覺醒に依て佛を求めるか又は覺醒せずして地獄を追つて居るか色々に分れて行きますので、十界とも分れ三千とも展開する譯でせう。

既にかう色々に分れて居る以上「個人的」な靈魂が認められて居る譯で、悟りの上では兎もあれ、迷情の存する限り靈魂の認められつゝあるは事實です。

唯だ問題は其の靈魂が「固り」として不變の狀態であるものなのか、或は變化し推移し相續し行く「動態」であるのか、そこが佛教的の見方かさうでないかの分れ目であります。一般に

は不變化としての靈魂を認めて居るやうですが、佛教では「固執」さへ取れれば自由に變化し擴大するものと見て居ります。

隨て佛にもなれる譯です。

また「業」は一般的には善業惡業不定業と分れて居るやうに一切の行爲から約束されますがそれは迷情の上の行爲に就てのみ云はれることで、成佛等の向上方面には云はれません。

殊に淨土教では如來の増上緣力に引かれて行くので、こちらの業力などは問題になつて居ないのです。それは、恰度太陽の光の前には螢の光りなど問題にならないのと同じです。

(正誤) 七月號「藤崎上人」の一文「佛因佛性」とあるは「緣因佛性」の誤植です。

序でに申し添へて置きますが、三因佛性とは「正因佛性緣因佛性了因佛性」の三です。

談相 仰天信

明相みやうさうは必要ひつえうのものか

問

問
六月號に「明相」のこ
とが云はれて居ました
が、あれは信仰的に誰にでもあ
り得るものでせうか、又はあら
ねばならぬものでせうか、其邊
のところをハッキリお示し下さ
い。(大阪 求道生)

答

答
 人にもより年齢にも依
 ると申し上げて置きま
 した通り、誰にも起る現象とは
 云はれませんし、また是非なく
 てはならぬものでもありませ
 ん。場合に依ては信仰の進歩を
 阻害することにさへなります。
 だから善導大師は黒障黄障
 白障と云つて障であるから
 懺悔せよと云つて居る位です。
 そんな信仰道中の一風景に足を
 止めて居てはならないと、夫れ
 への享樂執着を否定して居ら

れるのです。

信仰しんぎょうの本態ほんたいはそんなところに
あるものではありません。本氣ほんき
で如來にょらい様に念佛ねんぶつが出來できるか出來でき
ないかで決定けつていされることです。

六こん金じき色のの旗はた

問


 六金色（？）の佛旗を
 掲揚致したるに際し、
 その起原及び何々を表現したる
 かを問はれて困ります。詳
 細御教示願ひます。

答

(滋賀 吉村辨中)
 幡、旗、旗、「大言海」
 に依れば「文武の式又
 は佛式等に立て、目標とする具
 で、源平の頃から戦場で敵に
 身分を識別せしむる爲に用ひ初
 めたもの」との事です。また或

有ればあつてよし、無ければ
なくてよし、それは一切如來様
にまかせたらよいではないでせ
うか。心が散らうが散るまい
が、明相があらうがあるまい
が、こちらのはからひは一切い
らぬ事です。

書に依れば「幡に二種あり一は鬼形幡と名づけ、人頭兵具ノ幡、幡の面に鬼面神形等を畫き軍事等に用ふ。二は菩薩形幡と名づけ、佛法の幡なり。定慧の手、四波羅密の足、三身の坪、三角の智、形ありて、之を堂中に懸く。人若しこの幡の脚に觸るれば滅罪の得益あり」など云つて居ますが、現在用ゐられて居る「六金色」の旗は近世のもので、國旗などが用ゐられ

るやうになつてから、作られた
ものです。色は青黄赤白黒及び
其混色の六色です。青黄赤白
黒は正色でそれに其混色即
ち無色の一を加へたものと推
せられます。五色は古くから
用ゐられ、阿彌陀佛からの五色
の絲を渡すことは平安朝時代に
最も盛んで徳川時代にまで及
び今日でも應々用ゐられます。
印度では祇樹給孤獨園の西北の
角、太陽の没する處に「無常
院」があつて其中に西向きの一
立佛像が安置され、其像の右手
は舉り左手は一の五色の幡をか
かけて居り、病者は此像の後
から旛の端を取つて往生の想
ひをなして専心念佛し、命終
する者が極めて多かつたと云ふ
ことです。から、五色の絲五色の
旛など何れも淨土教關係のも
のらしう御座います。六金色が
何を表現したものかはよく存じ
ません。

鑽仰運動ニユース

鑽仰會の肌着を着けて

勇躍出征した草野君

第〇〇師團輜重上等兵草野虎太君三十九歳は今回の事變に際して、〇〇方面に出動の命令に接した。

八月一日福岡縣三井郡草野町専念寺支部では之が送別の祝宴を開いたところ、會員六十名に同町町長、調査部長、調査、町會議員も參加してその征途を盛んにした。

この日まで三日間送別祝杯攻めの草野君は、各方面の招待を謝絶して、沐浴身體を淨めて紋服、袴の禮装に日本刀を帶して専念寺の本堂に參拜し、會員と共に十分の別時念佛の後、導師江上秀靜氏に依り三歸戒、十念を授けられ、嚴肅の訓話の後、豫ねて本人望みの「念佛肌衣」が渡された。「念佛肌衣」といふのは白木綿の襦

袷、その背中に「南無阿彌陀佛」の彌陀號を謹書し、右に國威宣揚、武運長久と記し、左に住所姓名、姓名の上に「法然上人鑽仰會員」と記してある。同夜參加の會員によつて合掌十念の後で「南無阿彌陀佛氏名」を認め、この誠心

派遣將士の慰問袋に

「浄土」を入れませう

炎熱焼くが如き北支に於て一身を犠牲にして國家の爲に戦闘を續けてゐる派遣の各將士に鑽仰會員は心からの慰問をしませう。生死の境に働いてゐる將士には「浄土」は最も相應しい贈物です。緊張してゐる將士は必ずや「浄土」から心の糧を讀みとるに違ひありません。浄土宗務所でも約三千の慰問袋を作りますが、その中には「浄土」を必ず入れる事になりました。各支部でも派遣將士に是非とも「浄土」をお送り下さい。また派遣將士の家族にとつても「浄土」は唯一の慰問品です。會員の方々はどうか家族慰問の爲に「浄土」を送つて心から慰め、シツカリした精神を涵養して下さい。

の「浄土」である紙片を疊んで白帶の中央に容れて縫ひ付け、帯には「法然上人鑽仰會」の文字を墨したものである。同氏はこの肌衣を着て身も心も念佛で戦つて見せる、正義の前には名號の功益が利劍の切れ味とならうと云つて居た。越えて一日、未明に起きた氏は早速佛前に參拜し、墓所に參り、次で専念寺に參詣し「會旗」を先頭に、日の丸小旗に護られ、町内舉つて待受けの氏神社に參拜して、一死報國を誓ひて、めでたく自働車の人となつたのである。

派遣軍慰問に

中村理事渡支す

過般、中村辯康理事は北支の事態險惡となるや、浄土宗管長の命を受け、管長代理の資格で浄土宗慰問使として北支に派遣されたが、八月三日戦雲頻りに動く天津に無事到着し、司令部を始め各方面の將士並に義勇隊を慰問し、更に橋本參謀長の許可を受けて軍用列車に便乗し、豊台の第一線に進出し、第一線の將士を大いに慰問する等、暗雲低き北支の天地を縦横に駆け廻つてゐられる。今後益々各將士に心からの慰問をなして無事歸朝されん事を會員と共に祈る次第である。

西信寺例會

東京小石川の西信寺支部（主任栗本俊道氏）では八月八日午後一時より例會開會、講師に藤井實應氏列席し熱烈な講話を試みたが、約三十餘名の參會者を得て頗る盛會であつた。

會員の聲

▼「淨土」を座右にして……私は青年の頃、朝鮮の地では修養園に關係して熱心に修養したものであつたが、その修養事項が何となく自分の心にピッタリせぬものがあつた。善い事には違ひないがそれが私にとつては努めて行事する傾きがあり、窮屈なお行儀のやうなものであつた。その頃からは年代も太分過ぎて不惑近くなつた私には「淨土」の愛讀者となり、「法然上人」のみ名に於て念佛させて頂き、それから自得する生活方針といふものが次第に明るく、何とはなしに生き甲斐のある指針を得るやうになつた。私は蠶業、蠶絲、の會社に奉職し、自宅の經營の他に朝鮮にも多少の土地を有つて居ますし、養蠶の指導期に入ると一つ體が三ツも四ツも欲しくなるほど忙しいし、出張もし旅行もするが、その旅行先の宿で先づ第一に旅の疲れを休めて呉れるものは「淨土」である。私の手提カバンにはいつも「淨土」が入れてある。私はそのページを開いてみると、自宅の佛間で念佛したり、自宅の机場に

居るやうな落ち着きを感じるのである。「淨土」を通じて私は次第に親しみ難いと思つてゐた宗教、家の淨土宗にも近付けるし、理解の伴ふにつれて、主人としての私の態度は家庭的にも非常に變つて來たと云はれる。私は會社の女工や、その他の知人で多少とも精神的に苦惱のある人や、心的生活に傾く人にはいつも「淨土」をすゝめて居る。この雑誌は最初は大分佛教臭く、専門的であつたが、近頃は太分と平易になりつゝある。そして時々生活必要の指導者と首肯されるものがある。私はこの「淨土」の内容に今少し力あるもの、實社會的のものが流れ込んで來ねばならぬと思ふし、編輯する人、之を書く人も世間と少しかけ隔つて見える空氣を感じることもあるけれど、それでもこの「淨土」なしには私は淋しいほど毎月待ち設けるやうになつてゐる。机の上の一番上にはいつも「淨土」をのせて居る。私は例會のある専念寺まで一里の道途を自轉車で詣るのであるから、大した難儀なことではないが、何分多用の爲めに例會を缺席し勝である。でも「淨土」だけは皆さんに負けないやうに精讀してゐる。この上とも「淨土」か

ら啓發されることと思ふ。會員諸氏から指導の介添を受けることと思ふ。どうぞ健やかな發達を祈る……支部總會にて（福岡縣・内山官悟）

▼中野魁子先生……私は無學で良く意味を聞き違へて御叱りを蒙る者ですが、何うかそのお積りで御聞き流しの程を御願ひします。八月號の「この道」私は子供のない者で、人生を先生の教に近い方法でこれまで暮して來ましたが、あれは餘り極端でないかと存じます。が如何がでせう。特に「子供養育云々の點」現代の佛教家は宗團を超越した眞の佛教を表現し佛教の意味と見解を擴大せねばならぬ。「法爾の理法を我々實際生活の上に本現せねばならぬ」と叫ばれ、又六月號の椎尾先生の「念佛の現代的意義」なんかを拜聴する時、一入そんな感を深くされるやうに思はれてなりません。が「國亂れて忠臣出で家貧しくして孝子出づ」とか、知的に財的に躍進日本の現代の親等は子供の養育と云ふ事には相當の注意をしてゐる。「石にかじりついても子供だけは」と云ふやうな悲壯な覺悟をしてゐる。とにかく現代は矢張り中村辨康先生の「小消息講義」のやうな筆法

が圓滿だと思ひます。こんな方法で御執筆下されますまいか、如何でせう（平井善慈）

▼「淨土」への希望と念願……（一）

「淨土」によつて得るところの多いことを感謝すると同時に檀信徒に一々これを讀まして法味を會得さしたいと思ふ。然し檀家六〇軒月々六圓の負擔には堪へぬ貧寺である。讀者を増すことによつて定價を安くして欲しい。宗費や山費をどしどし入れて安くして欲しい。せめて半額位に（かくなれば小生は月給をさいて毎月全信徒に「淨土」を贈ることにする）（二）クリスト教徒の家庭には「家庭新聞」が配達される。本山のおきまり布教などよりも、この「淨土」を各家庭へ配る方が効果的であり、經濟的でもある。（三）代々の淨土教徒が天理教徒に代つた或は代らうとする。これ等の人々に與へる書が欲しい。さうした方面への無關心と無努力の宗門が恥し。せめて「淨土」に中村さんにでも是非書いて頂きたい。九月號に是非たのみます。信徒の全家庭へ「淨土」を贈る運動を起しませう。この願が無駄にならぬことを祈る（京都・六條生）

小 説

住^{ちう}
蓮^{れん}
と
安^{あん}
樂^{らく}

(完結篇)

飯 田 光 明
西 田 惠 泉 畫



惠泉畫

十一、鈴蟲松蟲

——その二のつゞき——

熱氣を孕んだ旋風——、もの凄（こ）い廻（ま）り風（かぜ）が塀（へい）に衝（あた）つて横（よこ）なぐりに流（なが）れてゆく。天（てん）が焼（や）けてゐるのか、地（ち）が焼（や）けてゐるのか、見（み）さかへもつかぬ焰（えん）の渦（うず）。續（つ）けさまに堂（どう）宇（う）が潰（つぶ）れていつた。すさまじい轟（とどろ）き——、雷（かみなり）のやうな地響（ぢこ）をたて、棟（むね）々が落ちた。太（お）い火柱（ひはしら）がそのたびにゴ—ゴ—と音（おと）たて、天（てん）を焦（こ）した。龍（りゅう）卷（まき）のやうな火柱（ひはしら）の中から瓦（かわら）が散（ち）つて落ちたり、千切（ちぎ）れ千切（ちぎ）れに焼（や）けほぐれた檜（ひ）皮（かわ）が、無（む）數（すう）の火（ひ）の粉（こな）になつて、二丈（ふたさ）も三丈（さんさ）も恐（おそ）ろしい勢（いきさつ）で吹（ふ）き上（あ）げられ、それがまた、折（お）からの熱（あつ）風にきりきりと舞（ま）ひながら果（は）てもなく散（ち）つて行くのであつた。人（ひと）々はたゞ右（みぎ）往（わ）左（さ）往（わ）して號（ごう）くだけ。小御所（こみよ）の庭（にわ）にまで火（ひ）の粉（こな）がばらばらと降（ふ）つておちた。

「松蟲（まつむし）さま！」

松蟲（まつむし）さま、松蟲（まつむし）さまと、何（なん）度も何（なん）度も呼（よ）びつゞける鈴蟲（すずむし）のこゑは、やがておろ／＼と涙（なみだ）に曇（くも）つて來（き）た。

胸（むね）の中（なか）が一杯（いっぱい）になつて、續（つ）く言葉（ことば）もあらばこそ、思（し）慮（りょ）は亂（みだ）れて譯（わけ）もなく泣（な）けてくるのである。白百合（しろゆかり）——まこと、谷間（たにま）にびよつこり咲（さ）いた白百合（しろゆかり）だつた。いた／＼しいまでに楚々（そそ）とした鈴蟲（すずむし）の旅姿（たびすがた）は、「松蟲（まつむし）さま——と絞（しぼ）るやうなこゑを放（はな）つて、松蟲（まつむし）の胸（むね）へとび込（こ）んで行（い）つた。抱（か）かれて、よ／＼と泣（な）いてみたい氣持（きもち）、「お姉上（あねさま）さま——」さう言（い）つて甘（あま）

えてみたい女（おんな）らしい衝動（しょうどう）を、ぐつと噛（か）み殺（ころ）しはしたものの、刹那（せつな）に熱（あつ）いものが込み上げて來（き）て、忽（たち）ち睫（まつ）を濡（ぬ）らしてしまつた。

「鈴蟲（すずむし）さま！」

「は、はい！」

わつと泣（な）けてくるのだつた。

「どうぞ／＼、お見逃（みのが）し下さりませ」

鈴蟲（すずむし）のこゑは震（ふる）へた。全身（ぜんしん）がびく／＼と痙攣（けいれん）するのである。恐（おそ）ろしいことだ、恐（おそ）ろしいことだ、今更（いまさら）のやうに大（おほ）それた罪（つみ）を犯（か）さうとしてゐる自分（じぶん）を省（かへ）りて、鈴蟲（すずむし）は戰慄（せんりつ）に似たものを感じないわけにはゆかなかつた。

「お願い、鈴蟲（すずむし）一生（いっせい）のお願い（ごんねん）でござります、松蟲（まつむし）さま、どうぞ／＼、

この場（ば）をお見（み）のがし下さりませ」

「鈴蟲（すずむし）さまとしたことが」松蟲（まつむし）はやさしく續（つ）けるのだつた「何（なん）といふ御淺慮（ごせんりょ）なことをなさります。淺（あ）はかな御（ご）しぐさと思（おも）はれてなりませぬ。人（ひと）の目（め）にたつ遠旅（とんりょ）のお装（ま）ひ、しかもこの深夜（しんや）、すぐにも事露（ことろ）顯（けん）の折（せ）を貴女（あなた）さまは如何（いか）お考（かう）へになりましたことやら——。松蟲（まつむし）、そればかりが案（あん）ぜられてなりませぬものを……」

大州（おおす）州（しゅう）、大州（おおす）と身（み）も心（こころ）も故郷（こきやう）へ飛（と）んでゐる鈴蟲（すずむし）に、どうして前後（ぜんご）を辨（わ）ける餘地（よち）などがあつたらう。たとへ捕（とら）へられてもよかつたのだ、旅（たび）の衣裝（いさう）に身（み）をかためたゞけで、云（い）ひ知（し）れぬ喜（き）びが湧（わ）いて來（き）てゐるのである。何時（いつ）に變（かは）らぬ松蟲（まつむし）のやさしいこゝろづかひは、身（み）にしんで嬉（うれ）しく

感じはするものゝ、この機を逸してはと遷る心は早鐘のやうに鳴り騒ぐのであつた。

「ご免下さりませう」

さつと身をくねらせて門際に小走る鈴蟲。タ、タ、タ、松蟲は追ひ纏つて、

「ご分別なさりませ！」

力をこめて握りしめる袖の端、振りほどかうとする鈴蟲と、捕へて離さぬ松蟲の、白魚のやうな指と指とが、しばらくはあやしく木の下影に糾れ合つた。そして次には言葉と言葉とが纏み合ひ、身體と身體とが揉み合つて、庭の暗い植ゑ込みへ消えて行つた。

さしも猛威を振つた大恩寺焼けも、陽が高々と上る頃にはたゞ煙だけになつて、焼け落ちた堂宇々々の残骸が、水をふくんでびちびと斷末魔の唸きを發してゐた。七堂伽藍が灰になつた他に軒並な商家が十三戸、棟になほして三十七棟、二刻餘りのうちに灰塵に歸してしまつたのである。同じく元久元年十月三日のことであつた。

十二、焼跡談義

街の姿は一夜にして變つた。五丁も六丁も焼野ヶ原が続いて、六波羅の屋並が近々と小御所のあたりから見えるのであつた。

昨日までは京洛に誇る山門の道場として善美を盡した大恩寺の伽藍が、今は悉く灰塵に歸してしまつたのである。火を吹くと同時に亂

打せられたあの梵鐘が、色も赤茶化て大地になげうたれ、大小無數の佛像が、手、足、胴、悉く四散して梁や棟木に打ち敷かれ、土足に踏み躪られた顔面や、焼け廢れた胴體のまゝで、今となつては足の踏み場もない位に轉がつてゐるのであつた。

「勿體ないことのう」

「ほんに、勿體ないことぢや」

老若男女が群がり合つて、このとてつもない不意の光景に憂ひの眼を澄り合つた。

大恩寺主賢玄僧正は、何處へどう姿を隠しましたのか見當もつかかなかつた。長老以下數多い衆徒達の姿も、言ひ合したやうに雲がくれてしまつたのである。雨の日、風の日が重なつてすぎた。けれど誰一人大恩寺の灰を掻く者がなかつた。焼けたまゝの残骸が十日餘りも風にさらされ雨に打たれてすぎた。

その頃、街々にこんな噂が流れはじめた。大恩寺跡に人魂が出て、夜な／＼半刻ばかりをもの悲しく泣き續けるといふのであつた。

中にはこんな解釋を下して、まことしやかに辨したてゝ歩く者もあつた。

「雷鳥ぢやよ、叡山の雷鳥が降りて來て光を放つのぢやよ」

すると何も知らぬ街の人々には、またそれが不思議なものに思はれてならなかつた。叡山と大恩寺を無理に結びつけて、いろ／＼な因縁をつけてしまふのであつた。臆測が臆測を生み、臆奇が更に臆奇を孕

んで「人魂」の話は眠はつた。

雷鳥の説も長くは續かなかつた。より神秘的な脚色が、今度は荒神口あたりから湧いて出たのである。

「佛さまの精ぢや、魔佛の精ぢや、泣いてござるのぢや！」

もう魔奇ではなかつた。目のあたり見る現實の姿なのである。土にまみれ、灰に血ぬられ、巨木の下に埋もれて、無數の佛像が喘ぎ喘ぎすゝり泣いてゐなさるのだ——、人々は今更のやうに勿體ないと感じずにはゐられなかつた。類焼した軒並の家々が、着々と元に復らうとしてゐるのに、これはまた何としたことであらう。大恩寺の跡ばかりは徒らに忘れられて、一と掻きの灰すら捨てられなかつたのである。

佛さまが泣かしやるげな——、こんな噂で街々が魔奇にかられてゐるとき、或る夜、鹿ヶ谷の草庵では住蓮と安樂の二人が、草鞋の紐を解きながら、

「専らの評判ぢやのう」

安樂房がさう云ふと、住蓮は大きく笑つて、

「狐狸の業とでも評して居るのか」

「佛さまの精が泣かしやるのだと申して居るのぢや、佛さまがの」

「佛さまがお泣きになるのか、わつは——生き佛ぢや」

「鹿ヶ谷の生き佛ぢや、わつは——」

庵を震はすやうな哄笑が溢れた。けれどすぐに二僧の面には緊張の色が浮んで來た。そして住蓮が言ふのだつた。重々しい力のこもつた

語調で——。

「努力が報いられて來たのぢや」

「大恩寺焼けの晩は、満月近い月ぢやつたのう」

「十四五日は悠にたつ」

「もう新月の出る頃ぢや」

「雨の日も風の日も、ようまあ厭はずに通へたのう」

「念力ぢや！」

「さうぢや！、山門の奴輩に挑なむ闘志がさせてくれたのぢや！」

「違ふ！、挑みはせぬ」住蓮の語氣は鋭かつた。「山門は山門、わし達にはわし達ぢや、わし達は、わし達の是と信ずる道を突進してゐるのぢや、山門と何の關はりあらう。焼野ヶ原へ通ひつめて禮讃を供養したまでのことぢや。大恩寺ぢやない、焼野ヶ原ぢや、魔壇ぢや、魔壇の佛菩薩に禮讃を供養したまでのことぢや！」

草鞋をぬぎ捨てると、住蓮はあたふたと須彌壇の前に坐つた。ぢつと頭を垂れて泣いてゐるのである。安樂は別に驚く様子もなかつた。

住蓮のからした態度にはもう馴れきつてゐるのだつた。近頃の住蓮は

「山門」と聞けば、例へそれがどんなことであらうとも、すぐに興奮

してしまふのであつた。そして定つたやうに罵るのである。

「山門の奴輩どもが！」

眼はたちまち敵意に燃えて充血するのだつた。氣味悪いまでの興奮だ、安樂房でさへさう思つて、そつと寒氣を感じたことも數へる限り



萬葉集

ではなかつた。そして興奮が覺めかけると定つたやうに、

「のう安樂どの」

と呼びかけて、目に溜つた涙を抜くひながら、

「わし達の身は、吉水、吉水源空上人に捧げたのぢやよ！ 専修念佛に殉ずる身體ぢや！ 南無阿彌陀佛の、このありがたい御法をどうして説かずに居られよう、のう安樂どの、解るのう？ 解るのう？」

ぬぐひ去る涙が二倍も三倍もになつて、そんな時には溢れ落ちるのであつた。

内に燃えさかる闘志を、磐石の重さで壓へつけてゐるもの——、それこそ愛宗の一念である。隱忍自重、己を殺すのだ、木偶になるのだ、——さうすることが最も危険のない方法であることを住運も安樂も知つてゐる。知つてはゐるものゝ、竹のやうな生一本な性格を、頭ごなしに殺してしまふことは容易でなかつた。それを近頃の住運房は、自分自身に強ひてゐるのである。



己を去勢することに、起請文連名の目からこの方、ずっと努力し續けてゐるのであつた。

だから今、

「挑みはせぬ、違ふ！ 違ふ！」

と連呼しつゝ、御舞臺の前に泣いてゐても、安樂房は別に驚く氣色も見せない。かへつて一點を凝視する目は、淵のやうな静けさを湛へてゐた。

大恩寺ぢやない、焼野ヶ原ぢや、廢墟ぢや、廢墟の佛菩薩に禮讃を

供養したまでのことぢや——安樂房はこの投げやりな言葉をくり返してゐるうちに、自分も泣いてゐることに氣がついた。

大恩寺に相違ないものを、廢墟ぢやくと打ち消す住蓮、闘志が燃えて居ればこそ毎夜のやうに通ひつめたのだ、それを何故否定せねばならぬのだらう。焼野ヶ原の佛菩薩に禮讃を供養したのだといふ彼の氣持が、安樂房にはよく解つてゐた。解つて居ればこそ、安樂房も泣けてくるのであつた。

明くる夜のこと——。

大恩寺の焼け跡に不知火が燃えた。漆を流したやうな眞つ暗い深夜に、黄色い鬼火がぼつかりと見えるのであつた。そして、これはまた何といふ落ついた、けれど、もの悲しい調であつたらう。得も言はれぬ莊重な聲が、冷たい風に翻々と流れてくるのだつた。

「鬼火！」

「鬼火！」

叫びながらあわたとしく馳けまわる足音が近い街々に聞えた。

日頃さま／＼な噂を傳へて、たゞでさへも氣味の悪い大恩寺跡にこ

の不知火である。人々の騒ぐのに無理はなかつた。

はじめの中は五人十人、一丁も二丁も離れて恐怖に齒をがち／＼と鳴らしてゐたが、やがて人影は次第に増して、それが遠巻の形になつた。そして同じやうに慄きながら評し合つた。

「鬼火ぢや、鬼火ぢやー」

「佛さまの精ぢやー」

「泣いてござるのぢやー」

大恩寺が焼け落ちてから半月、磯奇な噂の正體は、いよいよその假面を投げ捨て、本來の姿を現はさうとしてゐるのである。微かな音律——、地の底から湧いてゐるやうな激みない禮讃のこゑが、漸く人々の耳には入つて來たとき、別な音聲が朗々と彈みをもつて和合した。

と、次には滅入つてゆきさうな今までのこゑが、すが／＼しく張り切つて深夜の虚空に波打つた。絃を離れた矢が、ひゅーんと空間を擦つて消えて行くときの唸り、鐘の音が湖上を這つて果てもなく引いてゆく餘韻——、あゝ、うるはしい旋律！

高く、或は翺々と天樂のやうに稱へられて行くのである。

「南無至心歸命禮」

「西方阿彌陀佛」

何といふ魅力であらう。すでに人々は不知火の恐怖を忘れて、今は恍惚と禮讃の諧調に溶け入つてゐる。そして口々に稱名してゐるのである。

「南無阿彌陀佛」

「南無阿彌陀佛」

鬼火ぢや、佛さまの精ぢや、泣いてござるのぢや——、つい先程まで恐怖に震へながら、物見高く群がつて評し合つた言葉が、今は稱名に變つてゐるのであつた。鬼火々々として見てゐたのは蠟燭の火先である。ほつと安堵したこゝろを、得言はれぬ旋律が占めてしまつたのであらう。念佛するこゑがあちこちから起つた。

この光景を觀てとつた住蓮と安樂の心は躍つた。山門の法師達をくわつと睥睨してゐるやうな快感である。努力は報いられて來たのだ、遂に時機が來たのだ、涙が滂沱として頬を傳つて落ちるのを、ぬぐはうともせずに禮讃を續ける住蓮と安樂。

月のない眞つ暗い夜に、星だけがきらり／＼と光つてゐた。

「皆の衆！」

壓へつけてゐた感情が、たうとう叫ばしてしまつた。

「皆の衆！」

住蓮は高々と叫んだ。

「噂の正體は我々なのぢや。鹿ヶ谷のあたりに住まふ念佛衆、住蓮、安樂と名乗る二僧ぢや。近寄つて下され、近寄つて下され、ありがた御法を談義して聞かせ申さうー」

どつとざわめきが起つた。

「聽聞召され、聽聞召されー」

「皆の衆！ ありがたいことでござつた。鹿ヶ谷の住蓮と安樂、夢枕に大恩寺の佛さまを拜したのぢや。それからといふもの十日餘りの夜毎々々をずつとこの焼け跡へ通ひもうした。勿體なうてならなかつたのぢや。皆の衆！ この焼け跡は何故捨てられてゐるのぢや、何故顧りみられないのぢや、泣いてござるわ！ 佛さまが焼け出されて泣いてござるわ！ 大恩寺の法師どもは、一體何處へ雲がくれて居るのぢや！ あきれ果てた賣主どもぢや！」

すると住蓮がすぐ引きとつて言ふのだつた。

「皆の衆、皆の衆は山門の味方か、淨土念佛の味方か！」

「おゝさうぢや、天を見られよ、天を！ 數限りなうきらめく星、冷たい光ぢや、何といふ冷たい輝きぢやらう。それから皆の衆、この焰を見つめられい。燃えさかる只一本の蠟燭ぢや。天と地と、星と焰、冷たい理性と大慈悲の熱ぢや！」

「山門は自力ぢや。口稱念佛は絶對の他力ぢや。摩訶止觀も要らぬ、三學も要らぬ。たゞお纏り申すのぢや！ 罪も科も妄念も、あらゆる塵芥を包んだまゝのこの身このまゝが、南無阿彌陀佛と稱へることに依つて救はれるのぢや。阿彌陀如來の、溫かい大慈悲の光に溶け込んでゆくのぢや！」

「星は美しくしらめく。然し諸佛の姿ぢや！ それはまた諸行の姿とも見えるではないか——」

「法門の數は多い。けれど皆の衆！ 口稱念佛の教をおいて、何處に

絶對他力の法門があらう。天台、眞言、法相、華嚴、どれもこれも自力ぢや。自力の道を好きこのんでたどる者は、哀れむべき地上の大馬鹿者ぢや！」

語調が高まるにつれて、激越な言葉が迸つて出るのだつた。一語を發する毎に胸がすいて行くやうな快感を覺えた。

自讃毀他、さうだ、また南都北嶺の輩奴が憤ることだらう。面白い、怒れ、憤れ、俺達は俺達の信念を吐いてゐるだけぢや！ 專修念佛に捧げた身體ぢや——、臍を決め込んだ住蓮と安樂は、齒切れのよい能辨を競ふやうな形で、大恩寺跡の、焼け落ちた棟木の上に立ちはだかつて、明け方近くまで談じ續けた。

その翌くる夜も、二人はまた焼け跡へ出かけて行つた。禮讃が始まると、昨夜にも増して人々が集まつた。

住蓮と安樂は、聲の限り精根の限りを禮讃の節々に打ちこんで行つた。何時襲はれて果てようとも知れぬ身、南都北嶺が忌彈の的にしてゐる俺達だ、瞬時も念頭を離れない思ひが、今宵は分けても強く感ぜられるのだつた。殺られる日が來たのかも知れない、法に殉ずるときが來たのかも知れない——、豫感といふか推測といふか、そんな思ひが幻のやうに湧いてくるのだつた。そして殺るならやれ、といった捨鉢な氣持がむく／＼と起きて來て、最後を飾らうとする悲壯な意氣込が、今宵の無常偈を際立て、壯重なものにするのであつた。

暗い夜のことで、この人垣の中に觀山の奴輩が交つてゐて、どつと

襲ひかゝるのではないか。安樂が無常偈を誦してゐる時だつた。こんな思ひが稻妻のやうに住蓮の頭腦を閃いてすぎた。その刹那だつた。夜目にも白く眞正面から石文が投げられて來たのである。思はず身をかはした住蓮と安樂。

「石文ぢやー」

安樂が拾ひとつて住蓮を見た。

思ひも寄らぬ石文の飛來に、二人の面は更に硬ばり、颯々と燃える眼ではつたと人垣を睨みやつた。

前篇完結

作者附記

最初、三回か四回の豫定で執筆致しましたがところ、感興の誘ふままに思はぬ道草を食つてしまつたのです。ところが、この道草が却つて「人間住蓮」を生かしてゐてくれるのでせうか、夥しい激勵の御手紙を有知無知の方々から頂戴して、作者としては太いロツプを投げられたやうな心強さを感じてゐます。

五回を重ねてやうやく峠を越すまでに漕ぎつけましたので、これまでを前篇として一應休みたいと考へます。たゞ前篇と名づけるまでのこととして、前篇らしい結尾も無理につけませんでした。前後篇を通じて一つのヤマを作りたいと考へてゐます。

母の朝子、父の實通、それから更科のその後など、一體どうなつてゐるのでせう。鈴蟲も松蟲も一寸顔を見せたゞけで消えてゐます。殊に鈴蟲は旅姿のまゝで、何處にどうしてゐるのでせう。投げられた石文の正體を、どんなふうに御解釋下さいますか。大きな「謎の箱」に入れたまゝで來春までお別れします。

笑「記憶術」販賣法

『おいッ金を返して呉れ！』

『突然どうしたつて云ふんです。』

『この間、君が賣り付けて行つた「記憶術」て云ふ本ね、あれは實際馬鹿氣てゐるよ。記憶術どころか、あれを讀んでから、僕の記憶は一層悪くなつちまつたゾ！』

それ迄は一週間位前のことはどうやら覚えてもゐたもんだが今ぢや、まるつきり記憶が無くなつちまつた。朝目を醒すと頭ん中は白つ紙同然だゾ！』

『ちよつと待つて下さいよ。私が貴君に「記憶術」を賣り付け

たつて云ふのは本當ですかい？』

『だからよ、僕は一々そんなことはハツキリ覚えてゐられないと云つたぢやないか。』

『ぢや、そりや貴君の思ひ違ひです。私の賣つてゐる「記憶術」はそんなインチキぢやありませんからね。』

『ぢや、君ぢやなかつたかな。さア、解らなくなつちまつた。』

『ところで、先日貴方に御用立した十圓をお返へし願ひ度いもので。』

『十圓？』

『覚えてないんですか。そんなことだから困るんですよ。確かに一週間前貴君に十圓貸したんですからね。だから貴方は私の「記憶術」を買つて記憶力を回復する必要があるですね。』

『さうか、君がさう云ふなら買つて見やうか。でそれは幾位だい。』

『十圓ですよ。貴方に貸した十圓とで合計廿圓。』

『ぢあ、兎に角買つて試してみやう。おい、廿圓ッ！』

『どうも有難う。さよならッ』

『やあ、失敬！』

はそんなインチキぢやありませんからね。』

『ぢや、君ぢやなかつたかな。さア、解らなくなつちまつた。』

『ところで、先日貴方に御用立した十圓をお返へし願ひ度いもので。』

『十圓？』

『覚えてないんですか。そんなことだから困るんですよ。確かに一週間前貴君に十圓貸したんですからね。だから貴方は私の「記憶術」を買つて記憶力を回復する必要があるですね。』

『さうか、君がさう云ふなら買つて見やうか。でそれは幾位だい。』

『十圓ですよ。貴方に貸した十圓とで合計廿圓。』

『ぢあ、兎に角買つて試してみやう。おい、廿圓ッ！』

『どうも有難う。さよならッ』

『やあ、失敬！』

法語
解説何事なにごとか之これに過すぎ候さふらはん念佛ねんぶつがめでたきことにて候さふらふなり——

中 村 辨 康

九條殿下くじょうてんかの北政所きたのまんどころへ進しんずる御返事おへんじ

かしこまりて申あげ候。さては御念佛申させおはしまし候なるこそ、よにうれしく候へ。まことに往生の行には念佛がめでたき事にて候也。そのゆへは念佛は是彌陀本願の行なれば也。餘行は眞言止觀のたかき行なりといへども、彌陀の本願にあらず。又念佛は釋迦付屬の行なり。餘行は定散兩門のめでたき行なりといへども、釋尊之を付屬し給はず。又念佛は六方諸佛の證誠の行なり。餘行は顯密事理のやむごとなき行也といへども、諸佛之を證誠し給はず。此故に様々の行多しと雖も、往生の道には偏へに念佛がすぐれたる事にて候なり。然るを往生のみちに疎き人の申すやうは、念佛は餘行の眞言止觀の行に堪へざる易き儘のつとめにてこそあれと申は極めたるひが事にて候也。この故は餘行をば彌陀の本願に非ずと嫌ひ捨て、又餘行は釋尊の付屬に非ざれば選えらび止め、又餘行は諸佛の證誠に非ざるをもて止め收めて、今は唯だ彌陀の本願にまかせ釋尊の付屬に依り諸佛の證誠にしたが

獨留念佛

いのちとひかり

ひて愚かなる私しのはからひをばやめて、これらのゆへ強き念佛の行を信じつとめて、往生をば祈るべしと申事にて候也。されば惠心の僧都の往生要集に、往生の業には念佛を本とすと申したるは此意也。今は唯だ餘行を止め給ひて一向に念佛にならせ給ふべし。念佛に取りても一向專修の念佛がめでたき事にて候也。その旨は三昧發得の善導和尚の觀經の疏に見えて候。されば雙卷經には一向專念無量壽佛と説き給ひて候。凡そ一向の言葉は二向三向に對してひとへに餘行を選び捨て嫌ひ除く意にて候なり。往生要集にも諸行の中に念佛すぐれたるよし見へて候。又た傳教大師の七難消滅の法にも念佛をつとむべしと見えて候。されば君達などのお祈りの料にも念佛がめでたき事にて候。をよそ十方の諸佛三界の天衆の擁護し給ふ行にて候へば、現世後生の御つとめの何事かこれに過ぎ候はん。今は唯だ一向專修の但念佛にならせ給ふべく候。

— 和語燈錄卷三 —

凡ての生物に「いのち」と「ひかり」とを要求する本能があるのは、故意にさう考へるのとはちがつて、天然自然にさうならしめて居るのであつて見れば、その「いのち」と「ひかり」との根元即ち「無量壽」と「無量光」とを本體とする「阿彌陀佛」に南無する氣持は、事としては一見簡單のやうに見えますが、道理の上には天地の中心を貫くものがありますから、夫れ以外の一切の行爲に比較して實に天地雲泥の相違がある譯であります。

だから「念佛」のみは何んなに世の中が末になり荒みに荒んでも誰にも「實行され得るもの」として、釋尊も阿難に之を付屬せられたのでした。付屬と云ふのは一番大事な財産として遺し與へると云ふ意味で

行とまでは云
はれず

時代思潮

す。

隨て諸佛も其誠なることを證明して居ますが、之れも天地の根本的な意志力が、直ちに如來の本願となつて居るからこそであります。

眞言の坐禪とか天台の止觀などの事觀や、また其高遠な理を觀する修行や、其他色々な道德的修養、宗教的行法など、表面立派のやうに見えても事實は萬人共通のものでもないから、宗教そのものの價值から云つて、それらは、むしろ空文に均しいものと云はねばなりません。

ですから、釋尊も之等に對しては特別な心使ひもせず、諸佛も亦た出来ない相談の修行法を證人にまで立つて、萬人に勧誘する心にもなれなかつたのでせうと思はれます。

然るに法然上人時代に於ては、眞言の三昧法や天台の三昧法が「成佛の法」として考へられて居ましたから、それをやりたいけれども仲々困難で實際にはあきらめるより外になかつたので、それに代るものとして第二義的な方法として、念佛をして心をしづめ、或は數を多く唱へて其功德でと云ふ「量」で行かうとする人が殆んどと云つてよい位澤山ありましたので、それらは眞實の信仰も知らず、念佛の眞義も知らずに居るのだから、さうした誤りを訂正して、正しい念佛を理解せしめやうとなさつたものです。

そこで、此法語のやうに囁んでふくめるばかりに分り易くお話しをなさつて居られるのであります。

九條兼實公の奥方は、夫君の兼實公が、法然上人に依て念佛の信仰に入られて居た關係で、同じやうに念佛しては居られたでせうが、當時の時代思潮が餘程現實主義であり功利主義であつたと見えて、さう云つた意味に受取られ易い現實主義な「七難消滅」だの「祈りの料」だのと、取りつき易い言葉も用ひられて勸めて居られます。然し他面に於ては「嫌ひ捨て」とか「選び止め」とか「止め收めて」とか、例の後

になつて日蓮上人が「立正安國論」などでひどく氣にして居る選擇集の「捨拋閑閑」の強い言葉を以て「念佛一向」になるやう説かれて居ますあたり、寧ろ眞實の信仰への誘導法としては極めて巧みな方法を取つて居るものと推察致します。

北の政所が果して何れ程の信仰を得て居られたでせうか、文献の示すものがないから、よく分りません。兼實公の日記「玉葉」も、政界から退引せられる頃から、書くのが嫌になつたと見えて、筆を取つて居ませんので、其信仰的にはむしろ深くなつたであらうと想像せられます頃のことがよく判らないのは如何にも残念です。

然かも「玉葉」筆録時代の兼實公の信仰は大したものではなかつたやうであります。餘程程度の低いものです。イヤそれも今日から見てさう批判されるのですが、其頃としては、時代思想の外に立つことは、非常に卓越した人でない限り、出来ないことですから、むしろそれが、一番進歩して居たインテリ層の中で最も進んだ人達の考へであつたのかも知れません。

何しろ一切切御祈禱萬能で「授戒」の如き、規律ある道德生活をなすべき誓約の儀式をさへ「おふりかへ」のやうな意味のものに考へて「戒師に効驗があるの無いの」と云つて居た御時世ですから凡そ想像がつくでせう。

此點から見ると如何に法然上人が頭抜けて居たか、前人未發の新宗教を創立したことは、實に驚くべきことであると存じます。

科學的新發見などには偶然の機會と云ふことが相當に手傳ふやうであり、宗教の新提唱も迷信的なもの又は神秘的なものは、やはり偶然のインスピレーションとか若しくはエクスタシーとか云ふものに其動機

聖道門的行
の觀念から見る
べからず

があるやうであります。法然上人の「新念佛主義」に限つて、決してさうした偶然的なものではなく、理智の限りを盡しての結果でありましたことは、特筆大書に値ひすると存じます。

また「行」が重要視せられて居た此時代に、數に依らない念佛と云ふことは、むしろ「行」と名付くべき程のものとは決して思はれません。數で行くなら「行」と云へますが、法然上人のは「一念にも依らず多念にも依らず」數量を無視せずして然かも數量を超越して居るのですから、聖道門で言ふやうな「行」の觀念にはあてはまらないのであります。

ことに一切の諸善萬行を捨て、念佛の一元に歸するところ、聖道門的には全くの異端者であつたに相違ありませんが、信仰的には初めて本物になり本氣に入つた譯であります。雜然とあれもやりこれもやると云ふやうな統一のない修行法や、これも信じあれも信ずると云ふ様な雜信仰では、宗教的には極めて低いものと云はねばなりません。

だから「一向專修」と云ふことが、やかましく言はれたのも當然なことであります。

(字解)

○眞言止觀のたかき行||眞言の行は「三密加持の法」で口に陀羅尼を唱へ手に印相をなし心に本尊を觀ずるもの。

止觀の行は「常行三昧の法」などで、止は雜念を止めること、觀は正しく觀念して行くこと。

○定散兩門のめてたき行||定は心を統一すること、散は各種の善事善行のこと。

○顯密事理のやんごとなき行||顯教は華嚴天台三論法相等の教へ、密教は眞言の教で之等の修行法に事觀と理觀とがある。事觀は具體的な三昧法であり、理觀はそれらの理を觀じて行くことである。

○ゆへ強き念佛の行（ねんぶつぎょう）は色々の強い理由があること。

○三昧發得（さんまいはつとく）唱名念佛（しょうめいねんぶつ）に依て純粹（じゆんずい）な統一狀態（いつじつたう）になつたこと。

○雙卷經（じやうくわんぎやう）無量壽經（むりやうじゆきやう）は上下二卷（じやうげふたけん）になつて居るから。

○君達のお祈りの料（ねがひのりょう）君達（きみたち）とは貴女達（あなたたち）と云ふこと、祈りの料は現世安穩（げんぜあんゑん）の祈りなど。

○三界（さんがい）の天衆（てんしゆ）三界（さんがい）とは欲界（よくがい）、色界（しきがい）、無色界（むしきがい）で、欲界は五欲生活（ごよくせいかつ）のこと。此中に六欲天（ろくよくてん）と云ふ天衆（てんしゆ）がある。樂隱居（らくいんきよ）や吞氣坊（くわんきぼう）のことである。色界天（しきがいてん）は物質上（ぶつしつじやう）の世界（せかい）であり、無色界天（むしきがいてん）は精神的な形而上（けいじじじやう）の世界（せかい）即ち精神生活（せいしんせいかつ）のことである。何れにせよ。天衆（てんしゆ）とは直接産業（ちやくせつさんぎやう）に従事（じゆうじ）して居ない人達（ひとたち）を抽象的に云つたものであらうと思はれる。

（附記）

法然上人（ぽうねんしやうじん）から色々な人（ひと）に遣はされた御手紙（おてがみ）に就て、其人物（そのじんぶつ）や其解説（そのかいせつ）などを試みようとして書きかけたのであるが、今度突然宗命（こんどとつぜんしやうめい）に依り、北支（ほくし）へ慰問使（ゐもんし）として特派（とくは）されることになり、旅中參考（りょちゆうさんかう）すべき書物（しよぶつ）もなく、時間（じかん）もないので今回は是で御許（ごこ）しを得たいと思つて居る。

七月二十七日準備（しちがつにじちふたななび）を調へ、二十八日午後東京出發（にちようごごとうきやうしやうはつぽつ）、二十九日京都で法然上人（ぽうねんしやうじん）の廟（べう）に參拜（さんぱい）し、陸路（りくろ）を三十一日大連（だいちん）に到着（とちやく）したが、之から船で天津（てんしん）に向ふ豫定（よてい）である。（一二・八・一）

編輯後記

◇この夏久し振りで山へ行く機会を得た。同伴した若い案内人は生粋の山男であつたが、道々話の末に「俺ア穂高はおつかねえから行かねえ」と云つた。穂高は今は女學生でも行く。それなのにこの山男は「おつかねえ」と云ふ。「案内人のくせに意氣地が無いぢやないか」とからかふと、「さうでねえ、命は大切だから。」と臆面もなく云ふのである。

◇噉つては見たものゝ、私自身も一昨年、穂高で松葉某なる有名な案内人と名古屋邊の學生一人が前者は落石で、後者はクレパスに落込んで遭難した二つの事件を一日の中に眼の當りに見て些か青くなつた経験がある。で、この案内人の言葉は一概に輕蔑出來ないあるものを感じさせた。

◇血氣に奔る若い人達は唯單にス

リルを求め山を征服する誇りのためだけに山へ行く人が多いやうだ。山道は良く人生の路に譬へられる。山に對する心構へもまた同じではあるまいか。單に征服することの喜びだけを人生の目標とする人は、一日に何軒登ると云ふことだけを目標にして、雄大な自然との全き抱合の中に最大の歡喜を求めることを忘れた人達のやうなものだ。遭難し挫折する人はさう云ふ人達に多いのではな

いだらうか。超非常時の折心身の鍛練は勿論大切だが、この心構へを忘れたくないものだ。

◇今月は吉田絃二郎先生の隨筆を願ひして巻頭を飾つた。先生と本會との因縁は前號にも載せ、讀者も御存知のことであるが、先生の心境はこの隨筆の中にしじみと語られてゐる。今後とも先生に願ひして執筆を續けて頂く筈です。

◇特輯には特に宗教と生活との一元化の實例を纏めて見ました。非常時局に際して、信仰による生活の確立は刻下の急務であるとして、都市と農村とに實例を探りました。小林義正師は合掌村の創始者、指導者として御多忙中の中を特に筆を執つて本誌に寄せられたもの、戸松學瑛師は本山布教師として、實地に體驗せられたお話しを寄せて下さいました。兩師に對して厚く御禮申上ります。

◇中村辨康師は淨土宗慰問師として、北支に赴かれ、目下彼の地に於て御活躍中であるが、その旅中御多忙の中を車中、船中に於て稿を纏めて御送り下さいました。師の御奮闘を祈りませう。

◇眞野正順師は、疾を得て尙御静養中長くその健筆に接し得ず物足らぬことですが、一日も早く御全快、御元氣で誌上に見ゆる日をお待ちしてゐます。(大木)

淨土 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三年八月二十日印刷納本
昭和三年九月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人續仰會
東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
振替東京 八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば「淨土」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

中村辨康師著 最新刊

四六判四〇〇頁布裝函入美本
上人御肖像御筆蹟挿繪入
定價一圓五十錢送料十錢

法然聖五讀本

念佛に始まつて念佛に終
る!! ただ念佛の一願の
み!! 而して人は、不斷
煩惱のままに救はれる!!
信仰の偉力!! 一日一章
信仰への悦しきいざなひ

内典外典萬卷の書を讀破し、永い求道
苦悶の末に樹立した上人の宗教が一見
極めて單純であるやうに、その法語も
亦、表面は甚だ簡潔である。然もその
陰には、實に無限の意味が裏づけされ、
味へば味ふほど、盡きぬ妙味が湧いて
来る。本書は最も分り易い法語解説!!

親鸞聖語讀本 寺 彌 田 吉

四六判七五〇頁定價一圓八十錢

蓮如聖語讀本 寺 彌 田 吉

四六判七四三頁定價一圓五十錢

東京市麹町區三番町

第一書房

振替口座東京六四二二三
電話九段(33)一四一五・三三三四

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十二年八月廿日印刷納本 昭和十二年九月一日發行

淨土第三卷 第九號

定價金十錢(送料一錢)